# 資料翻刻2
# 椎名麟三講演メモ①

**椎名 麟三**（しいな・りんぞう 明治44・1911年〜昭和48・1987）
兵庫生まれ。小説家。本名・大坪昇（おおつぼ・のぼる）。旧制姫路中学中退後、職を転々とする。左翼思想に傾き、1931年に検挙され、留置所で転向を表明。戦後、千歳烏山駅前で開業した出版社の経営失敗直後に書いた「深夜の酒宴」（46年）を投稿、臼井吉見によって「展望」に掲載される。「重き流れのなかに」（47年）、「永遠なる序章」（48年）を続けて発表、戦後の実存主義を代表する作家となる。やがてキリスト教への信仰を深め、50年に洗礼を受けた。43年より没年まで世田谷区松原に住んだ。

【資料概要】

資料番号1241145　《椎名麟三講演メモ「戦後文学の意味」》
資料番号1241146　《椎名麟三講演メモ「文学する心」》
資料番号1241147　《椎名麟三講演メモ「自由と倫理（第一日）」》
資料番号1241148　《椎名麟三講演メモ「人間の自由について」》
資料番号1241151　《椎名麟三講演メモ「作家と生活」》
資料番号1241153　《椎名麟三講演メモ1》
資料番号1241154　《椎名麟三講演メモ2》
資料番号1241155　《椎名麟三講演メモ3》
資料番号1241156　《椎名麟三講演メモ4》
資料番号1241157　《椎名麟三講演メモ5》
資料番号1241158　《椎名麟三講演メモ6》
資料番号1241159　《椎名麟三講演メモ7》
資料番号1241160　《椎名麟三講演メモ8》
資料番号1241161　《椎名麟三講演メモ9》
資料番号1241162　《椎名麟三講演メモ10》

いずれもノート紙、縦書、鉛筆書、一部ペン書、一部赤鉛筆
大坪經子氏寄贈（平成27年度）

**当館収蔵の椎名麟三資料は、椎名麟三の長男・大坪一裕氏（故人）が所有していたもので、一裕氏が亡くなった後、夫人の經子氏に引き継がれたものである。椎名麟三資料の多くは郷里の姫路文学館に収蔵されているが、生活の拠点であり、亡くなった地でもある世田谷にも資料を納めたいという一裕氏の遺志により、270点の資料が当館に寄贈された。**

**寄贈資料のうち、講演メモは計34点。草稿など椎名麟三の直筆資料の多くに共通するのが、切り離したノート紙の罫線上に細やかな文字で書かれているという点である。講演メモの特徴としては、口述する内容のままを記しており、椎名が講演に際して入念な準備を行っていたことがうかがえる。『椎名麟三全集　全23巻別巻』（冬樹社、1970〜79年）収録の年譜に拠れば、作家デビューの翌年、1948年5月の松本中学校（現・長野県松本深志高等学校）と慶応義塾大学の講演会をはじめとして、以後、全国各所で講演を行っている。特に、1950年12月の洗礼後からはキリスト教の文学者として教会や集会での講演が目立つ。**

**講演メモのほとんどが前掲の全集に未収録である。資料名は、講演タイトルがわかるものについてはその名称を入れており、詳細不明のものについては「講演メモ1」などとした。全集に収録されている4点の講演メモを除き、残る15点についても本誌次号（下巻）にて翻刻掲載を予定している。**

【凡例】
■漢字の旧字体は新字にあらためた
■仮名　表記通り（ほぼ旧仮名）
■数字・記号　表記通り
■椎名自身による削除・裁断やページの欠落が多いため、前後の内容がつながらない箇所もあるが、そのまま掲載した
■削除部分については級数を下げ、かつ削除した内容を［削除　●●●●］のように表記した。紙が破れて文章が途切れている場合は［ヤブレ］、ページが欠落していると思われるものについては［以下ページ欠落］、意図的に裁断したと思われるものには［以下裁断］のように表記した
■文中には今日の人権意識に照らして不適切な表現があるが、原文を尊重してそのまま記載した



資料翻刻2

# 椎名麟三講演メモ①

**椎名麟三講演メモ「戦後文学の意味」（1241145）**

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆書

戦後文学の意味

一．何故小説を書くか。
　1．太宰治氏の死について
　　○女、子供の読むもの。妻が読み、夫が宣伝する。
　2．小説家に内在する原罪意識（自分にとつてどうしようもない生れながらに持つてゐる罪）
二．愛に於ける限定（原罪の発生根源）
　1．愛と死…キリストと姦通者
　　二つの肉体、肉体はあれど
　2．愛と思想…野間宏（肉体…愛は究極に於ては、肉体に於てしか表現出来ない。）
　3．愛と社会…昼の愛と夜の愛、電車のなかの人々、
　4．いかなる愛も死といふ限定をうける。…無意味
三．十字架（苦痛）を通じて、逆に結びつく。
　1．ドストエフスキイの歯痛み。…苦悩愛
　2．ニーチエの永劫回帰…運命愛。（本質的なものが回帰する。
　3．労働運動。…労働の苦痛、…無意味の苦痛。
四．戦後文学の意味
　1．思想の分裂…戦争の危機
　2．行動と主体の分裂…戦時の傷痕（恋愛に於ても、反省すると愛してゐない。）
五．無意味—虚無（ニヒル）を如何にして超へるか。
　1．自殺の考察—愛することが出来ない、虚無の典型…太宰の自殺前の挿話、虚無を超へようとして虚無を手段として消失する。
　2．超へようとし、超へずには居られない熱情のなかに自由がある。…それが自殺の自由。
　3．虚無のなかに生きてゐる。…自由、…真の恋愛。（神のかげさへ宿つてゐる）
　　平和運動

六、結論、生き延びて行きませう。どんなことをしても生き延びて行かうとじやありませんか。そして生き延びてあること、それが、一切の解決なのです。

## 椎名麟三講演メモ「文学する心」（1241146）

年月日不明、ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

文学する心　［削除　文学性ということについて］　中学マタイ、十八章一〇―一三

私は、中学校でお話しするのは、はじめてなので、「生きるということ」という問題でどうお話ししていいのかさつぱりわからないのであります。その上、ひどい訥弁と来ているのです。お医者さんの話によると、舌が少し普通の人より短い。二ミリぐらい短いらしいんです。お聞きとりにくいところがあると思いますが、しばらく御辛棒願います。

みなさん方は、お祭りや縁日、あるいはデパートなんかで、おかあさんやお父さんにはぐれて、迷子になつて泣いている小さな子供をごらんになつたことがあるでしょう。かわいそうだなとお思いになつたかも知れませんが、何故泣くんだろうとお考えになつたことがありますか。アフリカのズールー族という土人は、抽象的な言葉を知りません。たとえば、遠いところだとか、無限の彼方といつたような言葉であります。たとえば、ズールーの土人は、遠いところということを、「おつかあ、おれは迷子になつたといつて泣き出すところ」というんだそうであります。考えて見れば、なかなか具体的で、実感がありますね。それはとにかく迷子になつて泣き出すのは、「おつかあ」つまりおかあさんから遠く引きはなされてしまう、そのために淋しくなつて泣き出す。そのときの「おつかあ」とは、泣き出している子供にとつては、そこでは安全な世界をも同時にあらわしているといつてもいいのであります。おかあさんから手を引張られる、少くともおかあさんの眼のとどく世界にいるうちは、少々のいたずらをしても、安心していられることは事実であるからであります。

だが、その世界、安心していられる家といつてもいいのでありますが、それから遠くはなれることによつて、淋しい思いをしたことは、みなさんにもきつと経験があるだろうとそう思います。そのときはきつと、孤独というひとりぽつちという感じがするものなのであります。「いや、ぼくは、いつも愉快で愉快で、どんな遠い山んなかでひとりぽつちになつていても、愉快でたまらない」と思つていらつしやる方もこのなかにあるかも知れません。しかしイギリスのある小説にこんな話があります。ある仲間たちでつくつているクラブに一人の人気者がいたのであります。その男がいると、その集りはたちまち賑やかに明るくなつてしまうほど、陽気な男だつたのであります。淋しさだとか、ひとりぽつちというような感じは、みじんもその男にはない。ところが、その男は、偶然の事故で死ぬわけなのでありますが、その男を解剖して見たら、脳味噌がなかつたという話なのであります。

この話は、何をあらわしているか申し上げるまでもなく、人間が脳味噌をもつているかぎり、淋しさだとか孤独なひとりぽつちを感ぜずにはいられないものだということなのであります。ちよつとむつかしく申しますと、人間に意識というものがあるかぎり、その意識は孤独という性質をもつているということでもあるのであります。いいかえますと、ぼくはいつも愉快で愉快でたまらないと思つていらつしやる方も、もつと小さいときにこの孤独を経験していらつしやるのであります。さらにいいかえますと、人間が最初に知る自分というものは、この孤独においてだと申し上げられるのであります。

天才の方は、もう三つぐらいで、このような自分に目覚めるといわれています。しかし私は天才ではないので、その目覚めはずつと遅かつたのです。私は、姫路の郊外にある農村に生れたのであります。そこに母親の里の家、つまり母親が父のところへ来るまでに育つた実家に生れたのであります。しかし父は、大阪にいたわけで、その事実からも父と母との仲はあまりよくなかつたということがわかるのでありますが、しかしまた、母親は、実家の人々ともあまりうまく行つていなかつたらしい。というのは、農家には納屋といつて、収獲物なんかを入れておく物置で、私を生んでいるのであります。うまやで生れていたら、キリストのようにえらくなつていたのかも知れませんが、物置では仕方がない。そして三日目に、母親は私を抱いて鉄道線路をさまよつているところを警察に保護されて、大阪の父のところへ送りかえされている。だから六つぐらいまで大阪で育つたわけなのでありますが、ついに父と母との別居ということが起り、私が小学の一年になつたころ、母の実家のある村に小さな家を建て、そこで暮すということになつたわけなのであります。

ところで小学の二年になつた夏休みの終りのころであります。私は、東坂という村に住んでいたのでありますが、学校は西坂にあつて、そこへ通つていました。その東坂と西坂の間に、たんぼへ水をやる灌漑用の用水池があつて、その土堤を通つて行くのが近道なのであります。私は、母から用事をいいつかつて、西坂にある親戚の家へ行きました。しかしそこには友達もいることだし、遊んでいるうちに夜になつてしまい、あわてて帰つて来たわけであります。むろん近道の用水池の土堤の上を通つて行つたことはいうまでもないのであります。その用水池のあたりは、私たち少年の恰好な遊び場所にもなつているわけで、その池で泳いだり、菱の実をとつたり、ぐみの木もあり、忍術ごつこやかくれん坊をするにも恰好なところであつて、しかも今申したように毎日学校へ通うためにそこを通るわけですから、私たちにとつて、一番親しい場所であつたということができるのであります。真暗でも、平気で歩けるほどなのであります。帰りのおくれた私は、急いでその土堤を通つていました。そのときひよいと池のなかを見ると、直径六十センチばかりの金色の眼のようなものが、池のなかから私をのぞいて、しかも小牛の鳴くような声を立てているのであります。びつくり仰天しましたね。恐怖が私の身体をつらぬきました。私は、死物ぐるいでその土堤の上を走り、村のせまい道をかけ抜けて、やつと自分の家についたのであります。そして母親の顔を見たとき、安心したのでしよう、しくしく泣きはじめたのであります。母親は、父と別居して以来、幾分ヒステリツクな女になつていて、私が母親の意にそむくと、竹帚をもつて私をなぐろうとして、村中を追いまわし、どんなに逃げてもどこまでも気ちがいのようになつて、私を追つて来るといつた母親でしたが、私の泣き出したのを見て、どうしたのかと問いつめるわけなのであります。親戚の者が何か悪口をいつたのか、とか、誰かに何かされたのかとか、いやなかげ口を聞かされたのか、とか、いつて問いつめるわけなのであります。だが、私には何も答えることはできなかつた。自分の出会つたことは、大人の母親に話してもわからないし、わかつてもらえても軽蔑されるだけで一笑に付せられてしまうだろうと思つたからであります。で、もう蒲団をしいてあつた寝床のなかへ、夕御飯も食べないで、もぐり込んでしまいました。その私を見て、なおも母親はしつこく枕元へやつて来て、西坂の誰という名前を

あげて、その家の者がおかあさんの悪口をいつたんだろう、どんな悪口をいつたのかいえ、と私へ問いつめるのであります。私は、頭から蒲団をかぶつてしまいました。すると母親は、「けつたいな子やな」と吐きすてるようにいつて、台所の方へ行つたのであります。その母親の後姿が、もぐり込んでいる蒲団の隙間から見えました。そのとき、それまでに味わつたことのないつよい孤独感におそわれたのであります。そのとき見えた母親は、何かいままでのような母親ではなく、何かグロテスクななじみなんか全くない、おかしな生物というように見えました。それは私にとつてショツクであり、しかもそのために味わつている孤独が耐えがたいほど恐しかつた。で、起き上つて、すごすご用もないのに母親のそばへ行つたのであります。

みなさん方も、何らかの形でこのような体験をなさつているわけなのであります。少くとも小学校時代にそれを味つていらつしやる。お父さんにひどく叱られて、家をとび出したものの、行くあてもなく近所のあたりをぐるぐるまわつているときや、学校のお友達との間に感情的な行きちがいがあつて、いつも帰りは一緒であるにもかかわらず、ひとりで帰つて来るというようなときに、そんな孤独な自分に出会つていらつしやるわけなのであります。しかしこのひとりぼつちであること、孤独であるということは、ひどく恐ろしいものである。淋しいし、しかも身のおきどころもないほど淋しい。そこでそのような恐しさを忘れるために、日頃仲のあまりいいとはいえない友達をたずねたり、何かそんな自分をまぎらわすために、一人で遊べるように遊びをする。そして忘れてしまうのであります。そしてたしかに忘れることができるわけで、みなさん方のうちに、いままでそんなような思いに出会つたことがないとお感じになつている方もおありになると思いますが、私たちは、少くとも小学生のころに一度は、そんな経験をもつていらつしやるのだが、忘れてしまつていらつしやるだけなのであります。

孤独というものは、自分の安心して生きられる家、あるいは世界から遠くはなれるということなのであります。まさしくズールーの土人がいつているように、「遠い」という言葉を、「おつかあ、おれは迷子になつたといつて泣き出すところ」なのであります。だから孤独のおそろしさというものは、「おつかあ」から引きはなされている距離に比例するということがいえるでありましよう。だからまたその距離が無限であればあるほど、孤独も無限になるのであります。それでは距離の無限なものは何か。みなさん方に、こんな言葉をいうのは、まだ早いのではないかと思うのでありますが、それは人間の死なのであります。何かに絶望したときに、たとえば試験がうまく行かなかつたようなときに、ふと、「どこか遠いところへ行きたい」というような気のなさつた方があると思います。しかし「遠いところへ行きたい」と思うことは、ほんとは「死にたい」ということなのであります。［追記 この死の文学性とは、最初このような地点から生れて来る。ドストエフスキイとの出会。—サルトルの言葉］チエホフというロシアの文豪は、その「手帖」のなかでこんなことをいつています。「死ぬというのはおそろしい。しかしいつまでもいつまでも生きているということはなお恐ろしい」といつているのであります。それはその通りでありましようが、よく考えるとこの言葉はおかしい。死ぬということも、いつまでもいつまでも死んでいなければならないということであり、そして死のおそろしさは、この「いつまでもいつまでも」ということにあるのです。「いつまでもいつまでも生きるということはなお恐ろしい」というチエホフの感じる恐ろしさというものも、生きるということが恐ろしいのではなく、「いつまでもいつまでも」が恐ろしいのであります。

ちよつとむつかしくなつたようですね。私たちが、何らかの意味で孤独になつたり淋しくなつたりするのは、その根本には、人間は死ぬという事実がかくされているのだということを知つてもらえばたくさんなのであります。それは、小学生のころからすでに、はつきりとではないが、そのことを知つていらつしやるのです。孤独だとか淋しさとかいう感じとして、知つていらつしやるのです。それが、人間の根本的な自己、つまり自分というものに目覚める動機なのであります。しかしみなさん方のなかに、孤独な人、ひとりぼつちの人、淋しくて淋しくていつもお友達からはなれている方の姿をごらんになれば、「あいつは死んだみたいなやつだ」とか、「ほんとは生きていないような人だ」とかというふうにお感じになるでしよう。しかしもし人間にとつて死というものが、「いつまでも、いつまでも」でないということになれば、そのような方々も、孤独であつても、もつと生き生きと生きられるでありましよう。しかしこの「いつまでも」という無限を無限でないものに変えて下さつた方がいらつしやるのであります。死んで三日目に復活されたというイエス・キリストという方なのであります。いいかえますと、ズールーの土人が、「おつかあ、おれは迷子になつたといつて泣きだすところ」で、いつも「おつかあ」なる方が傍にいらつしやるとしたら、泣き出さなくてもすむということはおわかりになるでしよう。だから、私にとつてのイエス・キリストは、「もつと生きよ」という意味であり、「もつと十分に生々と生きることができるということを、私たちに可能にして下さつた方だと申し上げられるのであります。この私の言葉に不審をもつて、聖書を読んでみて下さればありがたいと思います。御清聴、ありがとうございました。

## 椎名麟三講演メモ「自由と倫理（第一日）」（1241147）

年月日不明、ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆書

自由と倫理（第一日）

1．泥棒の話

私は、杉原助*さんの依頼によつて、この修養会の講演を引受けたのでありますが、つまり私は杉原さんには妙な義理があつて、しかし義理というものは大切なものです。その義理によつて、ここでお話をすることを引受けた。ところが、委員長の馬場雅夫さんからいただいたお手紙を読んで、衝撃的なといつてもいい打撃を受けたのであります。この修養会のテーマが、「これからの日本の教会」であり、「キリスト者の新しい倫理を中心に」そのテーマを展開するということであつたからであります。これからの日本の教会という問題ですら、私には話す資格がない。私は、一人のまずしい信徒であり、ここに集つていらつしやる牧師先生方のように、日本の教会というような広い展望をもつていない。しかもさらに困つたことは、「キリスト者の新しい倫理を中心として」というのでありますから、およそ倫理的でない私にとつては、脱帽して願い下げにしたいとくらいな気持なのであります。こう申し上げても、納得していただけないでありましようから、一つの例を申し上げましよう。

ドストエーフスキイというロシアの文豪がいます。いますと申し上げても、実はもう天国にいらつしやるわけなのでありますが、この人の小説にこんな話がエピソードとしてのつています。ひとりの男が、宿屋に泊るのですが、その相客がそのころでは珍らしい懐中時計をもつているわけなのであります。その時計を見た彼は、どうしてかその時計にひきつけられてしまう。いわば殺されてもいいから何とかその時計がほしい

といつたような気持になつてしまうのであります。欲も得もないといつたらおかしい心境ですが、とにかく是が非でもその時計がほしい。そして遂に隙をみつけて、びくびくしながらその男の部屋にしのび込んで、その時計をぬすんでしまう。しかし彼は、その時計をぬすむ前に、ちやんと胸へ十字を切つて神のお許しを願つてから、ぬすんだのであります。まことに敬虔な信仰のふかい泥棒というわけでありますね。

さて、みなさん方のうちでは、泥棒をする前に胸に十字を切るなんて、神をけがすものだ、とこの男を非難なさる方もおありでありましよう。だが、泥棒をしようとしていなから（ママ）、それでも十字を切つて、神のお許しを願つているのは、願わない泥棒よりも少し上等だとお思いになる方もあるかも知れません。また、はなはだ倫理的な方は、泥棒をした以上、そんな十字はナンセンスだときめつけられるでありましよう。だが、とにもかくにも、客観的に考えて見て、十字を切つて泥棒をしたという彼の行為は、矛盾でありましよう。しかし私は、この彼が大好きなのであります。この彼が、十字架の前でふるえながら罪をおかしつづけている人間という存在のイメージが鮮烈な姿で描かれているという点においてでなく、この泥棒は、ほかならぬ私自身でもあるということなのであります。ここで、もはや私に、倫理なんか語る資格はないということがみなさん方に納得されたと思います。だからこれからお話しすることは、この前提の上で、ということを御承知願いたいとそう思うのであります。

ところで、この泥棒の行為をさらにみなさん方と御一緒に考えて行つて見たいと思うのであります。と申しますのは、人間の自由と倫理、少くとも神の前に立つところの人間の自由と倫理という問題に対して、端的な説明をしているものはないと思えるからであります。彼氏が、胸に十字を切らずにはいられないということは、自分のこれからなそうという行為が、あまりよくない行為、罪の行為であるという自覚があつたということを示しています。それにもかかわらず、そのような自覚を超えて、時計をぬすむ。いいかえれば世間的に見たつて、犯罪でもあるにもかかわらず、時計をぬすむということのなかに、彼の自由が証明されていると申し上げられると思うのであります。人間の倫理からの自由、神の倫理からの自由が、その行為となつている。彼氏の場合、その倫理の敷居は、時計がほしいあまりにとび越えることができたのでありますが、同時にそこに、滑稽ではありますが、同時に悲劇的でもある人間の自由の様相がうかび上つて来るのであります。キリスト教的に申し上げますと、人間の自由というものは、罪である仕方でしか、もつことができないということができると思います。つまり人間の自由は、罪である。しかし私は、この罪であるところの人間の自由にどこまでも同意をあたえ、心から愛したいというのが、私のキリスト者の、文学者としての立場なのであります。私は、泥棒の彼氏が好きだといつたのは、そこに、十字架の前におびえながらも、彼氏のぎりぎりの自由が表現されているからであり、そして私は、その味方をせずにはいられないのであります。

## 2．キリーロフ

たしかに、自由と倫理は、多くの場合、矛盾します。「チヤタレー夫人の恋人」のようにキリスト教倫理への反抗のなかに、むしろ人間の自由を見出すということもでて来るわけであります。倫理的なものによつて圧し殺された人間性の回復こそが、文学の任務でもあるわけなのであります。しかしここで自由と倫理の矛盾という問題に関して、このドストエーフスキイの泥棒の話とともに思いうかんで参りますのは、同じドストエーフスキイのなかの無神論者—正しくは人神論者の話なのであります。その箇所は、私をキリスト教へ導いてくれた一つの箇所なのであります。



りますが、それは、「悪霊」という作品のなかに出て来るキリーロフという男の物語なのであります。キリーロフは、技師（エンジニア）なのでありますが、性質は非常にやさしく、他人にも親切で、ことのほか子供好きであり、毎朝体操なんかするという、いわば人間的には、善良という文字を人間にしたような人間なのであります。ところが、彼は、一つの観念をもつている。つまりこの世のなかには、神様なんていうものはなく、人間が神様だという観念であります。彼は、そのことを友人たちに—その友人たちはいずれも一癖も二癖もある人々なのでありますが、この世に神はなく、人間が神であるということを証明しなければならない義務を感ずる。その証明の方法というのが、自殺なのであります。何故なら自殺は、カトリツクにおいても、神の恩寵に対する裏切りとして大きな罪の一つとされているようでありますが、まさにその理由によつて、つまり人間の運命の決定権は神になく、人間にあるという証明は、自分の自由意思によつて、自分の運命を決定できる自殺にほかならないわけであります。人間が、自分の運命を決定できるとすれば、まさに神は全能ではないわけであり、したがつて全能でない神は神ではないわけでありますから、自殺から神はないという帰結を引き出せるわけなのであります。しかしその決行の前日、かつてキリーロフのグループの指導者であつたスタヴローギンという男がキリーロフのアパートをたずねて来ます。この箇所は、アンドレ・ジイドというフランスの文豪も、その「ドストエーフスキイ論」で至福の予感のするところ、つまりほんとうの幸福の予感のするところとして取り上げているのでありますが、それは短い対話の箇所なのであります。

○木の葉の話。—「神を信じているだろう」

たしかに、神がなければ、人間にはすべて許されている。あの時計をぬすむというような小さな罪だけでなく、全世界の人間を抹殺することもさえ（ママ）も許されているのであります。この人間の自由、一切に対する人間の自由から、どうして「そんなことはしないだろう」という倫理性が生れて来るのでしようか。人間とはいいものであり、したがつてすべてが許されている以上、少女をけがしても、赤ん坊の脳味噌をたたきわつてもいいはずなのではないでしようか。それだのに「そうしないだろう」という倫理的なものが何故生れて来るのか、どうして人間の全的な自由から、それと相反する倫理性が生れて来るのか　私には、長い間わからなかつたのであります。ジイドも、この箇所は、至福の予感がするといいながら、その正体については、何の説明も加えていないのであります。おそらく説明できなかつたのではないかと邪推されさえするのであります。しかしその正体は、実は、「ほんとうにそれを知つているものは、そうしないだろう」という、「ほんとうに」にその至福の予感のすべてがかかつていると私は、後にやつと知ることができたのでありますが、むろんそれは、キリストに出会つてからのことなのであります。

＊杉原助　牧師。津山市出身。1927～2013年

## 椎名麟三講演メモ「人間の自由について」（124148）

年月日不明、ノート紙6枚　鉛筆・赤鉛筆書

人間の自由について

1．聖書と私との関係

［削除　私が、聖書というものを、自分の手にしたのは、終戦後間もなくでありました。］—私は姫路が故郷で生れて間もなく、大阪へ行き、父と母との不

和から、小学の一年のときに姫路へ戻つています。姫路といつても、農村で、そこに母の実家があり、そこへ小さな家を建てて、中学三年のはじめまで暮しているわけなのであります。と申しますのは、別居の条件として、子供たちの養育費は送るということでしたが、中学三年のとき、全く送つてくれなくなつていた。母の実家の援助も、母の父が死ぬことによつてあてに出来なくなり、精米所に借金がたまつていて、米をもつて来れない有様になつたので、長男の私は、病弱の母の代りになつて、大阪の父へ金の交渉に行つたのであります。だが、父は、私の知らない芸者上りの女と同棲していて、頭から帰れというわけで、結局帰りの汽車賃だけをもらつて、一度は大阪駅まで来たのでありますが、さて、そこで困つた。金をもたないで帰つたときの母の絶望が見えるだけでなく、私が帰ればそれだけ口がふえるわけですからね。といつて、今更父の家へ帰れない。どうすることもできないままに、ずるずるべつたりの家出をしてしまつたわけであります。しかし家出後は、当時の家出少年のたどるコースを順調にたどりました。出前持や少店員からコック見習から不良少年にいたるコースであります。しかしこの不良少年は、おかしな不良少年で、夜店でわかりもしない本を買つて来てはさかんに読んでいたようであります。しかしどういう理由で、そんな本を読む気になつたのかわかりませんが、ドイツの社会主義者であるベーベルの「婦人論」を読んでいます。赤表紙の厚い本でありましたが、その本によつて、最初の左翼的な洗礼を受けたようであります。

○天理教—邸を払うて、首つりたたまえ

キリスト教—アーメン・ソーメン、ヒヤソーメン

しかしここで、私の宗教への態度は、次第に決定的になつて行きます。母の自殺未遂を契機に姫路と神戸の電車の車掌さんになつたのですが、入つてまもなく、非合法の労働組合—全協と略称されていましたが、正しくは全国労働組合協議会の組織をつくりはじめています。そしてまもなく、その労働組合をプールにして共産党の組織をつくりました。

[削除　高木先生が、昨日の聖書研究でおつしやいましたように、なかなかヘブライ的であつたわけであります。しかしあまりヘブライすぎて勇敢すぎて」上部機関の方から、「君は、勇敢すぎて危険だ」という警告を受取りました。しかし私は、本来臆病者で、小さいときからネズミみたいなやつだと思つていたので、この警告は、不審でありました。しかし外から見ればずいぶん危険なことをしたということも事実であつたのでありましょう。というのは、党—そのころ弾圧に弾圧で、党の中央部はほとんど壊滅状態にありましたが、それでもときどき非合法の出版物がやつて来る。それには、「革命の[削除　日はもう近い」と書いてある。家出以来、自由を求めて来た私にとつては、何とかしてその自由の日を実現させたかつた、というにすぎなかつたと思うのであります。もちろん私は、同時に反宗同盟にも属していて、そのビラを書いた経験もあります。

○レーニン—愚民政策、民衆に対する阿片

○モルガンやフエザーなどの古代社会の研究—宗教の発生の起源

○死の意識の問題。

そのころ、もちろん文学には、全く縁がなかつた。—高木先生の非存在

実践のなかには、燃えるような孤独があります。ことにその実践が、非常な危険な場合は、そうでありますが、—後年の実存主義の問題

○鉄のおきて—鉄の規律—とアナーキイ—絶対の自由

同志愛と人間的なあらゆる愛情を超えたもの。

伊藤律の除名問題　　マルクスのいうほんとうの自由

ほんとうの自由のためには、すべてが許されている]



だが、みなさん方の日常生活においても、私や私の仲間がそうであつたように、このような漠然とした不安や淋しさや、孤独をお感じになるときがおありになるのではないかと思います。工場や会社からの帰りに、みなから別れて、自分の家への町角をふと曲つたときに、ひよいと「自分は一体何のために生きているんだろう」という気がなさつたことがあるのではないかと思います。また、主婦の方でしたら、台所でキユリを懸命にきざんでいらつしやる。そしてふと気がつくと、キユリが切りはなされずに全部つながつている。見ると、俎がつかい古されてかすかなくぼみの出来ているせいだとお気付きになつたとき、家の暮し全体の苦しさが感じられて来て、ひよいと「一体自分は何のために生きているんだろう」という気のなさるときがあると思うのであります。いいかえますと、このような孤独な淋しさというものは、この人生のいたるところで待ち受けていると思うのであります。

[削除　私は、そのことを、やがて極端な形で知らなければならないはめに落ちてしまつたのであります。というのは、運動していた私は、やがておきまりの検挙に出会い、第一審は、改悛の情なしということで懲役四年、控訴して未決にいるときに転向上申書を出して、懲役三年執行猶予五年で、未決監のある刑務所の裏門から放り出されたのであります。警察の留置場での約一年、未決の独房での約一年、つまり二年近くの牢獄生活が、私の一生の方向を決定したといえると思うのであります。]

[以下ページ欠落]

○自由と電灯の色の例。

読者の自由

高利貸の老婆と映画館の話。

3．自由について

たしかに現在は、自由という言葉がはんらんとしています。毎朝の新聞をごらんになつても、自由という言葉に出会わない日は、まずないと申し上げていいほどであります。先ず、自由民主党、自由諸国、貿易の自由化…

○自由の多義性

○簡単な筋の小説を例にとつて、みなさま方と御一緒に考えてみたいと思います。

①感動的な救い。

②死ぬことも生きることもできないこと

③「身の上相談」や「人生案内」の諸先生方

(イ) 男らしく決心してあきらめなさい。—主観的な救い方。

(ロ)「女つて一人や二人ではない。いずれあなたをほんとうに愛してくれる女性があらわれるから、安心して……一生懸命働きなさい」

(ハ) 電車の車掌時代の失恋。—二十三億

④「あきらめや決心」—個人の心こそが最後の救いであり、自由である—個人主義

「女全体、地球全体、階級全体、組織全体」—全体こそが最後の救いであり自由である—全体主義→滅私奉公

⑤人生観や世界観は、人間の何等かの自由に根拠をもたなければ成立しない。　　分裂のニヒリズム

[削除　○ホントウということ。

この人生に、そしておそらくみなさん方のいろんな愛情に、根拠をあたえてくれるほんとうの自由というものは、一体何なのでしようか。

映画—好きと愛　「あなたのことは死んでも忘れません」

国電—マンボ、ズボンの少年とスラツクス姿の少女。「死んでもはなれないわ」

私の若い時代「死んでも愛している」

今日、お話ししたかつたことは、「ほんとうの自由」がなければ愛はおろかこの人生さえその意味を失つてしまうだろうということであります。世界の若い世代もそれを求めている。

## 4．ほんとうの自由

しかし、この世界にほんとうの自由はまだ確立されていないのであります。当然そこにほんとうの［削除　倫理］この現代を生きるほんとうの道も確立されていないということが申し上げられると思います。この関係は、もう明敏なみなさま方のお察しの通りであつて、［削除　罪のないところに自由もあり得ないし、自由もないところに罪もないからであります。したがつて］ほんとうの自由のないところには、ほんとうの人生の意味もあり得ないということが申し上げられると思います。しかし何故、ほんとう自由（ママ）というものがないのでありましようか。［削除　人間にとつて、「ほんとうの自由」というものは、キリーロフの場合と同じように人間の死というものと関係があるからであります。］それは、「ほんとうの自由」という「ほんとう」というものがないからだといえると思うのであります。

○映画の話―「好きと愛」「あなたのことは、死んでも忘れません」

○国電の電車―マンボ・ズボンとスラツクスの十八ぐらいの少年

「死んでもはなさないわ」

○私は、何も失恋ばかりしていたのではなくて……「死んでも愛しています」

もちろん、このようなときには、それが何を意味しているか、私にわからないではないのであります。

人間にとつて、一切のほんとうというものは、人間はかならず、絶対に、そしてほんとうに死ぬという、この人間の死を根拠にしているのであります。死の保証によつて、はじめてその自由が、ほんとうのものになる。死をもち出すことによつて自分の愛のほんとうらしさが証明される、自分の真実というものか切腹（ママ）によつて明らかにし得るということは、私たち人間にとつてあわれな矛盾なのであります。何故なら死は、人間の真の、ほんとうの自由の根拠になることはできないからなのであります。いいかえますと、ある人が死んだとき、その人がなくなるとよくつかわれますように、なくなるということの上には、ほんとうというものもなくなるからであります。話の規模をもう少し大げさにすればよくわかると思うので申し上げますが、この世界が水素爆弾でふつとんで、人類が死にたえたとき、そこには、人間のほんとうのものと名付け得け（ママ）得る一切も消え失せてしまうということをお考えになればおわかりになると思うのであります。いいかえますと、人間は、誰一人としてこの人間のこの手でほんとうの自由、ほんとうの幸福というものをつかむことはできないと申し上げられるのであります。もし、このなかに、自分は、この自分の力でほんとうの自由をつかんでいると思われたり、ほんとうに自分は幸福だとお思いになっていらつしやる方があるとするならば、はなはだ申し上げにくいのでありますが、その方は、生きてはいらつしやるが、精神的には自分自身を失つていらつしやる、つまり自分のなかに溺れていらつしやるか、少し気がおかしいか、どちらかだといつていいと思うのであります。［削除　そして明日の「聖書と倫理」では、この点をさらにみなさんと御一緒に考えて行くことになるだろうとそう思いますが、ただ、今日は、人間は、ほんとうの自由、あるいは、ほんとうの愛というようなものをもつことはできないということを知つていただければそれでいいのであります。］

ちよつとむつかしい問題でありますから、簡単なやさしい例でさらにこのことを説明申し上げたいと思います。



○水に溺れるものの話。

このことによつても明らかなように、私たちは、「ほんとう」というものをもつときに、精神的にも、肉体的にも溺れ死んでしまうわけであります。文学者は、このことをよく知つていて、たとえば作品において、作者は、自分自身に溺れているとか、自分の考えに溺れているとか申す場合、作者は、自分というものを失っている、つまり作者は生きてはいないという意味につかつているのであります。とにかくほんとうの自由とか、愛とか、真実とか、正義だとか、人間にとつての倫理の基礎となる一切のほんとうのものは、人間の手のなかにもつことはできないということだけは、確言できるのであります。

いささか困つた話になりましたが、それでは、ほんとうというものは、ほんとうにないのでありましようか。それはあるのであります。人間の手のなかにはありませんが、神の御手のなかにある。しかしそれは人間の力によるものでなくて、イエス・キリストから与えられるという仕方で、人間はそれをもち、それに生きることができるのであります。話は、お期待通りのところに結着がついて、私としては、実に口惜しいのでありますが、事実はその通りで、仕方がないのであります。

とにかく、哲学や文学の面においては、もちろんのこと、国際政治の上においてもこのほんとうの自由が求められています。何故なら、それがないというところに、明らかな時代の壁が感じられるからであります。ことに若い世代においては、それがないといういら立ちにみちています。

イギリスのオズボーン「怒りをこめて振り返れ」

フランスの「危険な曲り角」（ジエイムスデイーン）　アンチ・テエト（ママ）ル　ベケット、「ゴドーを待ちながら」

アメリカのビート族―ジエイムスデイーン（エデンの東）

共産国のポーランドのフラスコ「週の第八の日」、「灰とダイヤモンド」（ジエイムス・デイン（ママ））

ソビエトの雪解け。

何故世界が、世界の若い人たちが、「ほんとうの自由は人間にはない」ということを嘆くという仕方で「ほんとうの自由」を求めているのか。それは、ほんとうの自由こそ、私たち人間の生きなければならないところの道であることを予感しているからだと申し上げられると思うのであります。端的に申し上げれば、ほんとうの自由こそ、ほんとうの［削除　倫理］現代を生きる道そのものであると申し上げられると思うのであります。この地上の現代の人間は、ほんとうの自由がないために、それぞれの実践のなかで、壁に直面しているということは事実なのであります。それは日常生活においてであるだけでなく、人間社会の上部構造である哲学や芸術や政治においてもそうなのであります。その意味で、［削除　イエス・キリストにおいてほんとうの自由をあたえられていることを知っている者は、］現代の人間は、この世界におけるあらゆる不可能の壁を破つて、新しい自由への道を切りひらいて行かなければならない運命をになっている。と申し上げられると思うのであります。［削除　文芸評論家の亀井勝一郎さんは、このような私を評して、狭い門から大きな荷物を背負つて入ろうとしてよろよろしていると批評して下さいましたが、一見、客観的にそのような滑稽なことが喜んでできるのも、それがたしかに不可能であつても、ほんとうの意味で不可能ではないということを知つているからであります。］

今日お話し申し上げたかつたことは、実に簡単なことでありまして、人間にほんとうの自由がなければ、毎日を生きて行く意味さえもなくなつてしまうということであります。訥弁でお聞き苦しかつたと思いますが、御清聴ありがとうございました。

## 椎名麟三講演メモ「作家と生活」（1241151）

年月日不明、ノート紙6枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

［削除　作家と生活（福島図書館）］

私にあたえられましたテーマは、「作家と生活」でございますが、作家がどんな生活をしながら作品を生んで行くかというようなことではなく、どんな生活体験が、私という一人の作家の作品を裏付けて行くのかというようなことをお話ししたいと思うのであります。と申しますのは、執筆したり（つまり仕事をしたり）会合へ出たり、食事をしたり、眠つたりするような作家の日常生活は、みなさん方と何等変りはないからであり、作家にとつて問題なのは、この人生からどんな問題性をあたえられているのか、その問題性をどう生きて来、またどう生きて行こうとしているのかということが決定的であるからであります。そこで、私は、私という人間の過去からお話しして行きたいとそう思うのであります。

―私は、関西の出身であります。最初大阪に暮していたのでありますが、父と母との間に不和があつて、母は父と別居し、母方のある当時姫路の郊外にある曽左村という農村に小さな家を建てて生活し、父は、大阪にいて、ある鉱山会社につとめながら、相場をしてかなりの金をつかんでいたようであります。父も最初のころは、一月に一度か二月に一度やつて来ていたようでありますが、二、三年もたつと、その父もやつて来なくなつた。同時に仕送りもとだえ勝になり、私が中学校へ入つたころからは、授業料もなかなか払えない状態になりました。そしてそれでも督促したり、嘆願したり、裕福でない母方の里の援助を得たりして、中学の二年は修了したのでありますが、生活は全く窮迫してしまいました。その上、母は、いまでいう欲求不満のノイローゼになつていて、始終胃腸をわるくして寝ている。その母の暗い顔を私は忘れることはできません。そしてある日、お前、大阪へ行ってお父さんにどんなに困っているかを話をして、お金をもらつて来いと私に責任があるかのように叱りつけるようにいうのであります。どこから工面したか、大阪までの汽車賃を出してくれたのであります。それで仕方なく、大阪の父の家をたずねたのでありますが、思いがけなく父は、芸者上りらしい女と同棲していて、私を見るなり、頭から叱りつけるのであります。それでも金の話をしますと、その女の顔をうかがうように見てから、今はない、汽車賃だけはやるからすぐ帰れ、というわけでとりつくしまもない。仕方なく汽車賃だけはもらつて、一たんは大阪駅まで帰つて来たのでありますが、母の暗い顔を思いうかべてはとても帰れません。しかも帰れば、私の分だけは口がふえる。といって今更、父の家へは引返せない。で、そのまま家出したのであります。そして現在にいたるまで家出のしつ放しであります。

その晩は、中の島公園のしげみのなかに、巡査の佩剣におびえながら一夜をすごしました。それからは、当時の家出少年のたどるコースを順調にたどつたわけであります。出前持から小店員や見習コックなどから不良少年にいたるコースであります。しかしこの不良少年は、おかしな不良少年で、さかんに本を読んでいたようであります。一方講義録で勉強もして、専検という当時の中卒の資格をあたえる試験検定を受けて合格しています。何とか現在おかれている境遇から自由になりたいと懸命に何かを求めていたらしいことは事実であります。当時読んだ本は、自然科学の本が多かつたようでありますが、どういう理由でそんな本を読んだのかわかりませんが、ドイツの社会主義者であるベーベルの「婦人論」を読んでいます。それは赤表紙の厚い本でしたが、その本によつて最初に左翼的な思想の洗礼を受けたといつていいでありましよう。それから左翼的な本をあさりはじめた。まだ満で十七才のときであります。

ところがそのころあるカフエーのコツク場にいたのでありますが、ある朝、ふと新聞を見ると、すみつこに三行ほどの自殺未遂者の記事が出ているのであります。神戸の近くの須磨の海岸で入水自殺をはかつて助けられ、須磨の警察に保護されている女の記事でありますが、その名前は伏せられていて、仮名と書いてある。だが、私には、これは母だという直感がありました。で、須磨へ行く一日のひまをマスターに申し出たのですが、マスターは信じない。それが私の母であるという証拠は、その三行の記事からは見出せるはずはないのですから、もつともな話でありますが、そこでマスターと大喧嘩になり、店をとび出して須磨の警察署へ行つたのでありますが、やはり母で、暗い四畳半の畳の間の保護室に、ひとりしよんぼり坐つておりました。それが転機となつて、神戸と姫路との間を走つている山陽電車の車掌になつたわけです。満十八にならないと車掌になれないのでありますが、見習期間が半年ほどありますので、その期間に満十八になる勘定だつたので、採用されたわけであります。この母は、その後自殺マニヤのようになり、私が獄中生活をしている間に本望を達しています。

だが、車掌になつて間もなく、非合法の労働組合―全協と呼ばれる全国労働組合協議会の組織を職場につくる運動をはじめています。それから共産党に入党し、その労働組合をプールにして、戦闘的な人々をピツク・アツプして、共産党の細胞の拡大をはかつていたのであります。そこではじめて文学というものにふれたのであります。党の非合法の出版物、たとえば戦旗などにときたま小説がのつていました。しかしそれらを読んでも、何かがちがうという感じがしていました。それらの小説は、必ずといつていいほど戦闘的な労働者が登場します。しかしそれらの労働者は、現実の私たち労働者とかけはなれているのであります。それらの小説は、残業に疲れ果てて飲まずにはいられない焼酎の味についても知らなければ、最終の車を車庫へ放り込んで、深夜の街を歩いて下宿へ帰る途中、ふと「一体おれは何のために生きているんだろう」と呟かずにはいられない内心にふいに起る孤独についても全く知らない。そして事実、心のなかにふかい絶望やニヒリズムをもつている人たちが、すすんで当時の危険な共産党の運動に参加して来た。むろん私自身も、そのような人々に労働者の一人としてふかい共感をもつていた。だが、小説のなかの労働者は、立派でありすぎる。いわば教科書的な人物が多いのであります。で、私は、いささか性急ではありましようが、「文学は、政治的な実践には何の役にも立たない」という考えをもつていたのであります。むろん今から考えますと、弾圧（ママ）に弾圧（ママ）につぐ切迫した状勢下でありますから、党の機関誌にのる小説もそのようにならざるを得なかつたであろうということは想像がつきます。むろん現在においては、事情がすつかりちがつているので、いわゆるプロレタリア文学においても、ちやんとあの焼酎の味やふいにおそいかかつて来るニヒリズムについても知つていることはいうまでもありません。

その後、二年あまりで、おきまりの検挙にあい、一度は東京まで逃げて来たのでありますが、結局東京でつかまつて神戸まで護送され、一年ほど神戸中の警察をたらいまわしになって、一審では、改悛の情なしということで、懲役（ママ）四年。控訴して未決の独房に一年ほどいたのでありますが、その間内面的な事件が起つたのを契機に、転向上申書を書いて、おかげで懲役（ママ）三年、執行猶予五年となり、刑務所の裏門から放り出されたのであります。しかしこの二年間が、私の生きて行く方向をかえてし

まつたといつていいでありましよう。警察にいるときに出会つた拷問、—しかし私はいわば下端の党員でありましたから、拷問であるから、やはりつらい。一回拷問されると、生きる力がなくなつてしまつたようになつてしまう。拷問されるのは、組織のメンバーを白状しろということでありますが、東京へ逃げたのも大きな原因になつている。党の中央部の誰かに連絡しに行つたのではないかと思われたらしい。その名をいえと拷問で責めたてるわけであります。しかし私は、ほんとに逃げて行つただけですから、白状しようがないわけであります。しかし三回目に拷問に引き出されたときは、身体も弱つていて、その拷問されている最中に、あまりの苦しさに、今度はいよいよだめになつてしまうだろう、死んでしまうだろう、そういう気がしたのであります。その一瞬に、運動にあけくれていた自分の生活全体がほんとうには何の意味もなかつたように見えて来た。しかしすぐ気を失つてしまつたので、結果的には、白状しなかつたという殊勝なものになつていますが、留置場にかつ

○拷問のこと

ぎ込まれて、あの冷たいコンクリートの壁にもたれかかつていたとき、そのときの自分の心が思い出されて、つよいショツクを感じたのであります。それは、自分の存在の底にある虚無に気付いたといつていいでありましよう。しかしそのような自分の事実にこだわるということは、プチブル的だと思い直して、考えないようにしたのであります。

だが、未決の独房のなかで、この事柄が愛の問題となつて観念的な形で起りました。私の片腕になつて働いてくれた木村義房*という男が、重態だということを秘密な通信で知つたからであります。彼は、運動中から肺がわるかつたのでありますが、私は彼を愛していました。それだけでなく、彼は職場の仲間であり、親友であり、さらには同志であつたのであります。彼が未決まで廻されて来たのは、私が彼も党員だと白状したからではありません。自らすすんで、自分の誇りとして、党員だと名乗つてしまつたのであります。そのような男でありましたが、彼が重態だと聞くと、私としてはじつとしていられなかつた。朝から晩まで、彼はどうしているか頭からはなれないわけです。どうしてもシヤバへ、社会へ出して、ちやんとした病院で治療を受けさせてやりたかつた。そのときひよいと妙な考えが頭にうかびました。私のにぎつていた組織のメンバーをすつかり白状するから、彼を仮釈放してもらえないかという嘆願書を出すという考えです。その考えは、たしかに私を戦慄させました。それは、私にとつて死ぬ以外につぐないようのない裏切りであるからであります。しかしこの考えは、一転して、—この点が、担当の看守に朝の点検のとき口をきかなければ、一日中、読む本もなく、小さな机の前に坐つていなければならないので、そんな生活を一年近くつづけていると、どうしても観念的になつてしまうという証拠であります—つまり彼のために死ねるかどうか、という問いとなつて自分につきつけられたのであります。ほんとうに愛するということは、その相手のために死ぬことだと私は考えて来ていたのでありますが、それでは彼のために死ねるかという問いに対しては、否という答えの心の中から聞えるのを防ぐことはできなかつたのであります。彼を愛していることはたしかであります。一日中、彼の病状が気にかかつているからであります。だから彼を愛していることはたしかでありますが、それではほんとうに愛しているかとなると、否なのであります。

もちろん私は、自分自身に弁解しました。そんな問いはブチ・ブル的だとか、観念的だとか、私だつてシヤバへ出れば、私自身にしか果せない役割があるんだとか、いろいろ弁解はつくのでありますが、彼のためには死ねないという事実だけは厳然と残るのであります。この事実は、私の信じていたいろんな愛にうたがいをいだかせ、そして崩壊させました。それではお前は、大衆を愛しているとパンフレツトに書いたりしていたが、ほんとうに愛していると思つているが、それではほんとうに愛しているか。たしかに愛しているが、ほんとうに愛していたのではない。自分は、死ぬためでなく、生きるために、自分の自由を獲得するために、この運動をはじめたのだといつても、ほんとうに愛していたのではないという答えのなかに、自分自身の空虚と無意味さを感ぜずにはいられなかつたのであります。そのとき、偶然、読み古した一冊の文庫本が、私のところへ差入れられて来たのです。誰が差入れてくれたのか、いまだに私にわからないのでありますが、恐らくそのころ壊滅したモツブル（赤色救援会）の差入れた本が、未決にいる誰かの手から私へわたしてやつてくれということだつたのではないかと思つています。それはニーチエの「この人を見よ」という岩波文庫本であります。だが、そのニーチエは、大衆を愛していないとなやんでいるお前ほど馬鹿野郎はないと笑うわけであります。自分の愛に失望している私を、さらに失望させるのであります。私は、自分自身に失望し、弁護士のすすめで、ニーチエを利用して、党も同志もほんとうに愛していなかつたという旨の転向上申書を書いたのであります。—姫路へ帰ること、母の失綜、マツチ工場。

出獄後は、すぐに上京したのでありますが、誰も知つた人のいないところへ行きたかつたからであります。むろん当時の特高警察の組織は完璧に近いものであつて、警察へとどけずに上京したにもかかわらず、私は、上京して一週間もたたないうちに、特高の訪問を受けなければならなかつたのであります。おかげで、前身がバレて、すぐそこを首になつてしまう。運送店の店員やカフエーのコツク場にかくれたことがありますが、結局筆耕屋になつたわけであります。ガリ版を切つたり、封筒の上書きなどをする仕事であります。そこでは前身をとわない。人が多ければ多いほど、社主にとつてはいいわけなので、つまり稼ぎの二割をピンハネすればいいわけです。たしかに当時の筆耕屋の仲間には、暗い過去の影をもつた人が多かつたと思います。その間私はもつぱら実存哲学の本を読んでいました。実践のなかのあのふかい孤独や自分の内面にふかい口をひらいている虚無というものの解決なしには、生きて行けそうもなかつたからであります。それらの哲学者の名前をあげれば、ニーチエをはじめとするキルケゴールやベルグソンやヤスパースやハイデツガーなどであります。しかしそれらの本を読んでも、ますますニヒリズムに陥るわけであります。私の求める答えは、それらの本になかつたといつていいでしょう。［削除　時間があれば私の求めていた答は何かにふれるつもりであります。］

私の求めたのは、何であつたか。それはほんとうの自由であり、ほんとうの救いであつたのであります。何故ならもし人間にほんとうの自由［削除　への希望］がないならば、ほんとうに愛することはできない。それだけでなくこの人生には何の意味もないからであります。

だが、私の心のなかに、「人生には、ほんとうの自由もなければ、ほんとうの救いも解決もないのだ」という考えだけが形づくられて行つたようであります。もしその私にとつて、生きている理由があるとすれば、何かとたずねられれば、死ねないからだという情けない答えしかなかつたのであります。

戦争のはじまる少し前、筆耕屋にも出張仕事というのがあり、丸の内の新潟鉄工所に行つているうちに、そのまま社員になり、生活も安定し

たころ、ふとニーチエの賞めている三人の作家に好奇心を起したのであります。一人は北欧のシユテフイター、一人はゲーテで、とくに「エツケルマンとの対話」をあげています。しかしこの二人は、さほど私をおどろかせなかつた。しかし三人目にあげているドストエーフスキイを読んで、あつと思つたのであります。文学というものは、こういうものかと思つたのであります。そのときは、はじめにお話しましたように満で二十七になつていました。そのときドストエーフスキイから学んだことは、「たとえ人間にほんとうの自由も解決もなくたつて、救けてくれつといつたつて少しも差支えないのだ」ということであります。「地下生活者の手記」のなかに歯痛（はいた）になやむ男の話が出て来ますが、彼は、医者へも行かず、まる二ヶ月もの間、うなりにうなりつづける。彼は、何故そうするかを説明して、このうなり声のなかに曰くがあり、快感があるのだといつています。ほんとうの自由もない、ほんとうの解決のない人間の出すうなり声—それは、「助けられるのぞみを持たない人間の助けを呼ぶ声だ」といつていいと思うのであります。そしてこの助けてくれという自由を求めて訴える訴えこそが、文学なのだ（ママ）いつていいのであります。フランスの実存主義の哲学者でもあり作家でもありますサルトルが「文学とは、自分の自由の、他人の自由への呼びかけである」といつていますが、要するに「救けてくれえ」という訴えにほかならないのであります。そして私もはじめて、小説を書こうという気になつたのであります。

○しかし自由とは何なのでしょう？

［削除　以上が、私が、文学をやろうとした動機であります。

ここで問題になつて来るのは、文学者は、どんな自由を求め、それに生きているかということでありましよう。と申しますのは、文学というものは、徹頭徹尾人間を問題にいたします。人間をはなれては、文学というものは成立しないのであります。そして人間の問題は、究極には、人間の自由の問題と関係なしには、考えられないのであります。これは、文学をつくる面から考えても、明らかだと思われるのであります。—つまり文学者だけでなく、人間の求め、それに生きている自由というものは、この世のなかを照す光源のようなものだといつていいのであります。たとえて申し上げますと、自由をもつていない］

［以下ページ欠落］

＊木村義房　宇治川電気（山陽電鉄）時代の同僚。1931年8月に検挙された。

## 椎名麟三講演メモ1（124153）

年月日不明、四〇〇字詰原稿用紙半分（裏面使用）1枚　鉛筆書

今日「人間について」といふテーマでお話し申上げたいと思つてゐますことは、人間についての、所謂人間学としてではなく、この現代に生きてひとりの作家としての僕が、人間についてどう考へてゐるかといふ自分自身に与へた問ひに対する自分の答として、お話し申上げたいと思つて居ります。しかし僕が、人間といふものは、こういふものだと思ふといふとき、必ず、僕は、人間といふものはこういふものだと思つてゐるが、これは間違ひではないでせうかといふ疑問符がついてゐるといふことを、お忘れにならないでいたゞきたい。と申しますのは、人間は、人間を決定的に知ることは出来ない、知ることが出来たと信じてゐても、それは、ひよつとしたら誤解であるかも知れないといふ可能性から免れることが出来ないと思ふからであります。何故、誤解であるかも知れないか、或ひは誤解だと思つてゐることが、既に誤解ではないかといふ問ひの起るのは自然なのでありますが、その問ひの前に、その問ひの根底となるところのものから申上げたいと思ひます。（幾分、話が弁証法的となり、その上、話下手でありますので、弁証法的な考へ方に馴れてゐない皆様方のある方には、単なる詭弁と聞え、単なる逆説と聞えるかも知れませんが、この話の後に質問をお受けすることになつてゐますから、そのときその理解の疎通しない点をひらきたいと思ひます。）

1．人間は、どうして人間を知り得るのでありませうか。人間とは何かといふ答へになる基礎になる知識はどうして得られるのでせうか。僕は作家でありますので、理論的ではなく、体験認識的にお話し申上げたいと思ひます。そしてこの人間はいかにして知り得るかといふ問題が、文学の上の表現の方法を決定して居るのでありまして、素朴実在論的リアリズム、自然主義的リアリズム、社会主義的リアリズム、そして戦後出て参りました実存主義的リアリズム等の方法に区別して居るのであります。どうしてこういふことが起るのでせうか。

α．こゝで話してゐる僕は、皆様方からごらんになつて、何だとお思ひになりますか。僕は、僕自身では人間であるつもりなのでありますが、どうでせうか。これは御相談申上げてゐるのです。猿だと云はれても僕は決して怒りません。進化論によれば、僕はまがふことなく猿の子孫であるからであります。—皆様は、お笑ひになりましたね。といふのは、僕が人間であることは、自明であるからであります。そんなことは、問題なく判つてゐることでありまして、さういふことを問ふといふことは、それ自身をかしなことなのであります。そして人生に於ける大切なこと、といふものは、多分にこのやうなをかしさをその一面にもつてゐるのでありまして、作家といふもの、とくにこの人生のことを真剣に考へる作家ほど、このやうなをかしさから、運命的にまぬがれることは出来ないのであります。このをかしさは何から起るかと申上げますと、作家の心のなかに、ひとりの例外者が住んでゐるからであります。云ひかへますと、僕がこゝで、僕は人間であると申上げたとたんに、笑ひと共に、いやお前は人間ぢやないと云ひたくてうづうづした方が、この皆様方のなかに、ひとりかふたりはあつたと思ひます。そしてそのやうな方がだまつて居られるのは、若し、さういふ方が今立つて、お前が、自分が人間であると云つてゐるけれど嘘だ、お前は人間ではないと云はれたら、他の方々はまた

［以下ページ欠落］

## 椎名麟三講演メモ2（124154）

年月日不明、ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆書

今日お話しようとする命題は、一応「現代文学に於ける諸問題」となつて居りますが、正面切つてそのテーマに対するという風ではなく、むしろ感想風に自由に話をすゝめて行きたいと思つてゐます。時折り自分のもつとも深ひ関心をもつてゐる問題については、とんでもない方向へ脱線するかも知れません。それは講演に馴れてゐない、口下手の作家の愛嬌としてお見逃しを願ひます。

○現代の文学に於ける問題は、第二次大戦への回想と、第三次大戦への不安にはさまれてゐる、云はゞ苦悩と混乱といふ時代的な特徴への理解なしには、何の意味も持たないと極言することが出来ます。それは、終戦後、どのやうな問題が、どのやうな形で起つて来たかを、ざつと振り返つて見たいと思ひます。最初、終戦後の文学的な問題としてとり上げられた、織田作の〝可能性の文学〟でありませう。この世の一切の問題

が、それがどんな問題であつても、その問題自身単独で起り得ないのと同様に、可能性の文学は、私小説に関して、私小説の否定として提起されたのであります。

・可能性の文学—文学に於ける冒険性の主張。偶然の問題—自然主義リアリズムの因果的必然論への反逆。パトス
驟雨の解説。—批判 偶然が絶対化されると、一切がただよひはじめ、作品と作家の関係も偶然となる。

・戦後文学—私小説的なリアリズムで、現代がとらへられないといふこと。リアリズムの変遷—自分と人々との関係。→自分と人々の関係を規定するものとして、家、民族、絶対性の欠如。→絶対的な他者。人類。→批判、志賀直哉の兎を例にとる。（カメラ）好奇　曖昧

○どうすればいいか。（実践）［削除　その分析］。—これは、主体性論議や、実存と社会、或ひは政治と文学などといふその後に起つた多くの問題と関係をもつてゐる。

・分析—どうすればいゝか、といふ問ひは、何ものかに関して、人々の生き方が問はれてゐる。何に関して問はれるかによつて、その表現は異つて来る。しかもその問ひは、問ひ自身のなかに、相反した二つの弁証法的な契機に分析される。云ひかへれば、どうすればいゝかといふ問ひは死ねばいゝといふ答へで終る。直接的な人間は、こゝで自殺する。弁証法的な人間は、これに対し、死ぬことが出来ないといふアンチテーゼをもつてゐて、そのやうなアンチテーゼをもつてゐるといふことが、キエルケゴールを待つまでもなく絶望なのである。すべてのどうすればいゝかといふ問ひは、このやうな、客観的な、合理的な、最終決定的な答をもつてゐる。その答へに対して死ぬことが出来ないといふ反逆は、それ自身、客観的な合理性に対する反逆であるから、非合理的なものであり、このやうな非合理的なものを根拠としてゐるのであるから、分裂は当然である。云ひかへれば、主体性論議も、実存と社会の矛盾も、或ひは政治と文学の問題も、その分裂した二つの間の、果てしなき会話である。それは、やがて会話の果てしなさのなかに、疲れ、飽き果てゝ、蒸発してしまふ。—文学そのものが問はれてゐる政治と文学について考へて見よう。政治に関しての文学。

・政治と文学—政治を文学に対する優位。或ひは文学を政治に対して優位にあるといふ見方。—文学と政治の相対性。他を否定するといふことは、他から否定されるといふことである。
政治と文学との絶対的な断絶　それぞれは、それぞれの根拠をもつ。—福田恆存氏。プロレタリアの主張に対する時宜を得た発言
政治と文学との実践によつて媒介されるもの。—プロレタリア文学。どちらも曖昧化でなく徹底化でなければならない。
政治と文学、その他の論議の意味。—この時代に於ける文学者の責任が問はれてゐる。
この時代に無責任なるもの。—記録文学、エロ文学。
この時代の絶対性—サルトル　無限性の不足（世界文学、新年号、誰がために書くか。）
有限者として有限性のなかだけでは責任をもつことが出来ない。
その点に於て、共産主義は、実存主義よりすぐれてゐる。
文学者はこの時代に対して如何に責任を持ち得るかといふ問ひを問ひつゞけてゐる。



## 椎名麟三講演メモ3（124155）

年月日不明、岩波書店用箋5枚　鉛筆書

宗教というものと、文学というものは、本来何の関係もないのだ。とにかくそれがどんな宗教であつても、人間の救われるのは、この世界に於てではなく、死んだ後の世界に於てである、というの点に於て共通しているからである。この世界に於て、人間が救われるというのは、邪教であつて、たとえその救いがどんな形で与えられるにもせよ、この世界に於ける救いであるかぎり、計算し得るものとして、具体的なものなのである。その救いは、必ずある不幸からの自由として、与えられる。そしてその自由は、その根拠となつている不幸と量的な比較をすることが出来るのである。

この世界に於ける救いは、一万円より一万二千円の月給の方がより多いという、量的な判断の可能な救いなのであり、その救いは、そのような相対的な自由を意味しているのである。その判断は、また百人を救うより百十人を救う方がより正しいことを示して居り、歩きより自動車に乗る方が、その行動半径の比較に於て、より自由であることを実証し得る自由なのである。だからこの世界に於ける不幸は、量的なものであり、量に還元し得るのであり、したがつて、そ不幸からの自由としての救いも、量として計算し得るものなのである。そこには死という主体的な問題は、いささかも関係がない。それは人間の力によつて、不幸は幸福へ量的に変革し得るのであり、人間の力によって、不幸から脱出することが出来るのである。いわば、この世界に関するかぎり、不幸は絶対的なものでないのだ。しかし人間のこの相対的な不幸を絶対化するもの、たとえそれが運命としてであれ、罪としてであれ、そのようなものとして絶対化して見せるのが、邪教の魔術なのであり、人間に対して阿片として働くところの宗教なのである。たとえば、プロレタリアとしての自己の経済的な不幸な運命は、プロレタリアの力によつて、相対的に変革し得るものなのである。しかしその不幸な運命を、いろいろな観念によつて、たとえば前世に於ける宿縁であるとか、それがその人の人間として不可避な神から与えられた運命だとかいうことによつて、その人の自由への要求を押しつぶす役割を演じている宗教は、明らかに人間に対して虚偽を押しつけるものであり、僕たちは、そのような宗教を阿片として、拒否せずには居られないのである。

不幸というものは、いままで説明したように、自由と関係をもつている。僕たちは、自分を不幸と感ずるときに、自分の自由に於て、現在の自分を眺めるからである。金のない自分を不幸と感ずるときは、金がない、という不自由から解放された自由な自分が、憧憬として心のなかにあるときである。自由への意識が現実の自分を照らし出すのであり、その光りで現実の自分を眺めるときに否定的な暗さをもつて感じられるのである。不幸という意識は、そのような機制をもつているのだ。だから自由の意識のないものにとつては、不幸の意識もない、ということが出来よう。そしてその自由が、不幸な自分を、その自由へ変革することを命ずるのであり、この世のあらゆる実践は、その命令によつて導かれているところの実践なのである。だから自由の意識に［削除　於て］貫かれていない実践は、実践ということは出来ない。いいかえれば、それは動物的な盲目的な行動なのであり、僕たちの日常は、このような行動によつて満ちている、と云つて過言ではない。会社へ行くのも、習慣としてであり、食事をとるのも、習慣としてであり、実践の本質は、蔽われてしまつているのである。だがもし、会社へ行くことが、自分の自由のた

めの行動であるということが意識されているとき、その行動は、はじめて実践という性格をもつ。たとえその自由が課長になつた自分として、その人に思い描かれていてもいい。その自由は、平社員である現実の自分を不幸として自分に示す。そして彼は、現実のその自分の不幸を、［削除　幸福な　したがって］自分が自分の自由と考えるところの幸福へ変革するための行動として、毎日の自分の会社づとめを意識するならば、その行動をはじめて、実践と呼ぶことが出来るのである。一歩すすんでいうならば、実践というものは、革命的な性格をもつていないかぎり、実践ということは出来ないのである。

云ひかえれば、この世界は、量の世界として、決定的に唯物的な世界なのである。いまの会社員の自由も、量的に、つまり科学的に実証し得るのである。そしてこの世界は、いささかも神に関係をもつてはならないし、神と関係をもたせようとするあらゆる試みに対しては、断乎としてたたかわなければならないのである。僕たちは、僕たちのこの世界を僕たちの責任として引受けなければならないのである。たとえそれは不可能に見えるにせよ、その不可能は、相対的なものである。帚に乗つて空をとぶという、その時代には子供らしい空想として、童話にあらわれた不可能、それを可能にするのは魔術に頼らざるを得ない、と考えられたところの不可能も、いまは立派な飛行機として空をとんでいるではないか。絶対不治と考えられた病気も、ペニシリンやその他の新薬によつて、簡単に治し得るものとなつているではないか。この世界には、宗教の介入する余地などは全くないだけでないのだ。僕たちは、この世界のこのような唯物的な性格をきびしく自分たちの前にもつていなければならないのだ。

そして文学も、この世界を、そしてこの世界の実在を扱うかぎり、文学の世界は、決定的に神と関係がないということ、もしそれが神と関係をもつとすれば、むしろ神がない、という実証となるにすぎない、ということを、しつかりと認識することが必要なのである。

1

僕は、この講演に於いて、明らかに一つの目的をもつています。それは、僕が洗礼を受けたということに関して、文学者からいわれる多くの言葉、真のキリスト者であれば、救わ[ママ]ているのであるから、文学はやれないはずだ、ということから、キリスト者は、文学をやつてはならないというような禁止的な発言に対して答えるということであります。この問題は、キリスト者の側からも、信仰と文学は一致しないというという[ママ]訴えや、信仰と文学はどう結びつくのかという疑問などが、その一致は不可能だという暗黙の前提となつて、持ち出されるのを見るのであります。そして僕のこの下手な講演が、キリスト者に於ても文学は可能である、という消極的な答えではなく、真の文学は、キリスト者にだけ可能であるのだ、ということと、この問題は、同時に信仰と実践、永遠と時間などの問題といささかも変りもないのだ、ということを皆さんに知らせることが出来れば、本望だと思うのであります。

2

［以下ページ欠落］



## 椎名麟三講演メモ４（１２４１５６）

年月日不明、ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆書

女子高

「生きるということ」は「愛するということだ」という古い諺があります。で今日は、愛という問題にかぎつて、私自身のくだらな［ヤブレ］験に即しながらお話したいと思つています。

私は、父と母との不和から、大阪の父のもとへも行けず、といつて姫路にいる母のもとへも行けないで、そのまま家出してしまつたのであります。中学三年の一学期のとき、つまり満十四才であつたのであります。しかし家出後は、はなはだ順調に、と申したらおかしいのですが、つまりは当時の家出少年のたどるコース、就職の容易な出前持から不良少年にいたるコースを順調にたどつています。しかしこの不良少年は、おかしな不良少年で、さかんに本を読んでいました。現在おかれている状態から何とかして救われたい、現在の境遇から何とか自由になりたい、そのてだてを本から教わろうとしたといえるでありましよう。当然、結局は、現在の社会制度そのものがだめなんだ、という信念をそれらの本から与えられて行つたようであります。

母が、須磨で入水自殺をはかつたのを契機として、山陽電車の車掌になりました。早速、当時の非合法の労働組合を組織し、それをプールにして、つまりその組合から、意識的な労働者をえらんで、共産党の細胞を組織しました。

［以下ページ欠落］

愛．自由．幸福

⑥

女子高

その間の二年の牢獄生活が、私の生きて行く方向をかえてしまつたといつていいでありましよう。一つは、警察で何回かの拷問にひき出されたとき。私の場合は拷問といつても簡単なものであつて、この講堂の広さの警察の道場の真中に引き出され、鍵型におかれた低いちよつと腰掛のような低い机の一方に検事がすわり、一方の机には書記がすわる。そして特高刑事がその前で拷問するのでありますが、つまり後手にしばつた間へ竹刀をつつ込んでこじ上げるというだけのことですが、しかしすごく痛いし苦しい。一回拷問をされると、歩く力さえなくなつてしまう。しかし何回目かの拷問に引張り出されて拷問されているとき、思いがけない自分を見てしまつたのであります。いよいよ駄目だ、ここで死んでしまうだろうと思つたとき、ふいに運動にあけくれしていた自分の生活全体が見え、その生活全体はほんとうには何の意味もなかつたのであります。しかし特高の方は、そんな私の心を知らないものですから、えいつとしめ上げたので、私は気を失い、結果的には白状しなかつたというけなげなものになつておりますが、私のそのとき見たものは、私を打ちのめしてしまつていたということは事実だつたのであります。

これと同じことが、未決の独房において起りました。それは観念的な形で起つたのであります。問題は、観念的な事柄なので、その話ははぶきますが、要するに「ほんとうの意味では同志も大衆も愛していなかつた」という事実に直面したといえるでありましよう。このことは、同時に、「ほんとうの意味では生きているのでない」ということも意味していたのであります。出獄後も、特高につきまとわれながら、したがつていつも飢えながら、この人生の「ほんとうの意味」を求めて、もつぱら哲学の本を読んでいました。それは、実存哲学といわれる系譜の本であります。おかしな自殺をはかつたのは、その間[カン]のことであります。何故

なら、それらの本に、生きるほんとうの意味を見出すことのできなかつた私にとつては、この人生は、生きるに値しないと思われたからであります。しかも最後のギリギリのところで死ねなかつた私は、自分はやはり臆病者だと思つていました。もしその当時の私に向つて、「何故生きているのか」とたずねる人があつたとしましたら、あの情ない答、つまり「死ねないからだ」という情ない答しかなかつたでありましよう。

[削除　その後、ロシアの文豪であるドストエーフスキイを読んで、はじめて「文学というものはこういうものか」と知つて、小説を書きはじめ戦後発表しはじめたのでありますが、「この世には、ほんとうの救いもほんとうの自由もない、したがつて生きるほんとうの意味もない」ということを書きはじめたのであります。しかし、私は忽ち困つてしまつた。生きるほんとうの意味がないならば、]

[以下ページ欠落]

## 椎名麟三講演メモ5（124157）

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆書

○これから考えて見ますと、人間の「ほんとうの自由」という場合のほんとうというものは、人間の死というものに関係があるようですね。ふかく考えますと、全くその通りなのであります。「ほんとうの自由」という場合の「ほんとう」だけでなく、「ほんとうの真実」、「ほんとうの正義」、「ほんとうの愛」、そういつたもののほんとうというものは、すべて人間の死というものに関係なしには、口にすることのできないものなのであります。たとえば「ほんとうの愛」というものについて考えて見ましよう。

。映画―好きと愛、あなたのことは、死んでも忘れません。

。国電―マンボ・ズボンとスラツクスの十八ぐらいの少年少女。

「死んでもはなさないわ」

。私の若い時代「死んでも愛している」

○ほんとうに愛している。　絶対にはなさない

○そして人間にとつて、一切のほんとうというもの（ママ）は、この人間の死に根拠をもつている。つまり何が嘘であつても、死ぬということだけはほんとうだということにであります。そのことは、また人間に「ほんとうというもの」つまり、「ほんとうの愛」、「ほんとうの正義」「ほんとうの自由」といつたものを手にもつことはできないということもあらわしているのであります。

○一つのわかり易い例を申し上げましよう。―水に溺れる者の例。

[削除　○それでは、ほんとうというものはないのでありましようか。それは、たしかにあるのであります。しかし残念なことではありますが、人間の手のなかにはありませんが、神の手のなかにある。ほんとうというものに無関心なうちはいいのでありますが、一たびほんとうというものを自分のものにしようとしたとき、人間は、死ななければならないのであります。真実を見たもの、この場合の真実は、ほんとうというものなのでありますが、真実を見たものは死ななければならないという有名な言葉もそのことをいつているのでありますし、また戦争中、武士道とは死ぬことと見つけたりというはがくれのことばも、武士としてのほんとうの生き方というものは、死ぬということのなかにあるということをいつているのであります。だが、死ぬことによつてほんとうの人間となるということは、それ自身おかしなことでありましよう。それは矛盾であるだけではなく、ナンセンスであるからであります。

○今日読んでいただいた聖書の場所は、このほんとうの自由というものがなけれ]



## 椎名麟三講演メモ6（124158）

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆書

○希望と自由との関係

私は、ドストエフスキイというロシアの作家によつて、文学への眼をひらかれた者なのでありますが、ドストエフスキイの作品の魅力は、極端への魅力だという人もあります。しかしドストエフスキイは、人間の極端をねらつているのではなく、どんな小さな現実もふかく見つめようとする彼の作家的態度からやつて来るのだといえると思うのであります。その典型的にあらわれているのは、「未成年」という作品だと思うのでありますが、その主人公のアルカージイは十八才の少年なのであります。その少年は、いわば私生児の非常に孤独な少年なのでありますが、彼は、その孤独のなかで、ロスチヤイルド（ママ）になろうという理想を育む。ロスチヤルド（ママ）というのは、当時パリにすんでいた世界的な大金持で、いわば現在のロツクフエラーのような存在なのであります。しかし私は、このようなアルカージイという少年をつくり出したドストエフスキイの心が手にとるようにわかるのであります。つまり彼は、それほどひどい貧乏だつたという現実が、その人物の創造のなかに感じられるということなのであります。いいかえれば、ドストエフスキイ的な発想というものは、その人物の創造のなかに端的にあらわれているということなのであります。

彼は、こういう考え方をする。いま、千円という金がとても欲しい。人を殺しても欲しいくらいに、いま、千円の金がほしい。しかしそれだけにとどまるならば、彼はあのような大作家にはなれなかつたでありましよう。彼は、そこから一歩すすんで、千円ほしい自分をつきつめて行く。何故自分は、千円ほしいと思うきりなんだろうか。百万円ほしがつても一向差支えないではないか。むろん百万円あるに越したことはない。じや何故千円であつて、一億円じや困るのか。一億円ならむろんその方がいい。じや、何故地上の富全部じやなくて、ただの千円なのか。こうして彼は、千円ほしいという現実的なあまりに現実的な希望から、その希望のなかにかくされている自分の真実を引き出して来るのであります。彼は、アルカージイという少年に、こういわせずにはいられなかつたのであります。「私には、金は必要ではない。といつて語弊があれば、私に必要なのは力でも力（ママ）でもない。私の必要としていたものは、ほんとうの自由なのだ」

このことからも、ドストエフスキイは、千円ほしいというような卑近な日常的な希望が、人間のどんな希望にもとずいてる（ママ）かというほんとうの姿を照し出してくれるわけなのであります。いいかえますと、それがどんな希望であれ、希望というものは、人間の自由への要求にもとずいて（ママ）いることを示してくれる（ママ）のであります。そして事実その通りであつて、人間のあらゆる希望というものは、実は自由を希望しているのであります。

[以下ページ欠落]

## 椎名麟三講演メモ7（124159）

年月日不明、ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

。しかし私は、小さいときから自分を唯物論的に教育して来た。

。信じられないままに

○イエス・キリストへ自分の全部をゆだねる仕方において信じられるものとなつたということができる。

考えてみるまでもなく、ほんとうの自由、ほんとうの救い、ほんとうの愛、ほんとうの正義という場合のほんとうというものは、人間の手のなかにもつことはできない。いわばほんとうと名のつけることのできる一切は、いわば神の手のなかにある。神という言葉につまずく方は、人間の次元を超えたものに属しているとお考え下さつて結構なのであります。それは、人間がどんなに努力しても、人間の手にはもつことはできない。しかし絶対不可能かといえばそうではないということを、私は、イエス・キリスト［削除　から教え］において示されたのであります。信じられないことでありますが、イエス・キリストにおいて、私たち人間へあたえられているとということを知つたのであります。［削除　明日は「ほんとうの」自由というものの具体性とは何か。聖書、一日の苦労は実はそのことでありますから、お許し下さい］今日お話したかつたことは、［削除　つまりみなさん方に］このほんとうの自由、ほんとうの救いなくては、自分の人生はむろんこの世界も意味を失うだろうということであります。文学もその例外ではない。そして先刻も申し上げましたように、それこそこの現代の求めているものであり、これから生きて行く［削除　若いみなさん方］私たちの責任でもあるだろうと思うからでもあります。ちよつとしたことからも私たちは、同じ問題につき当らざるを得ないといつていいのでありましよう。―ドストエーフスキイに「未成年」という作品があります。その作品の上の主人公は、アルカージイという十八才の少年でありますが、その少年の考えもそこに到達せざるを得なかつたのであります。たとえば、おしるこを食べたり、あるいは山や海へ行つたりするために、千円ほどのお［削除　金］こづかいがほしいなあ、とお思いになつたことはありませんか。そのときアルカージイという少年は、こういう考え方をするんです。どうして自分は、一万円でなく千円ほしいと思うんだろうというふうにです。むろん千円より一万円の方がいい。それじや一億円じやわるいのか。むろん一億円の方がいいにきまつていますね。それじや世界中の富をもつといいわけですね。しかしドストエーフスキイはそれで行きづまりません。世界中の富以上のものを何故求めないのだろうか。そこではじめて、千円のおこづかいがほしいと思つている自分の心は、世界中の富以上の富、ほんとうの自由と救いを求めているという自分の心に行きあたるのです。千円のおこづかいがほしいということは、それをもたない自分からの自由と救いを求めているわけでありますが、そのほんとうの自分の心は、ほんとうの自由、ほんとうの救いにつながつているわけなのであります。だからどんな小さな自分の要求や不満でも、大切に考えていただきたい。さらにできるだけ欲張りになつていただきたい。そのなかには思いがけない真理がかくされているのだということを申し上げて、私の今日の下手な話を一応打切りたいと思います。御清聴ありがとうございました。

## 椎名麟三講演メモ8（124160）

年月日不明、ノート紙2枚半　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

ドストエフスキイにならつていうならば、私は、遂にこの偉大な言葉を口にしたというところでしよう。しかし、自由とは何なのでしよう。むろん自由という言葉は、みなさん方には、わかり切つた言葉のように思つていらつしやると思います。毎日の新聞をごらんになつても、「自由」という文字につきあたらない日があつたら奇蹟だと思われるほどであるからであります。自由民主党、自由諸国、あるいは貿易の自由化などと、自由という文字がなくては、新聞記事が書けないほどであります。ところで一たび、じやその自由とは何か、ということになつて来ると、あいまいになつて来るだけでなく、使われ方によつて意味がちがつていることがわかるのであります。

たしかに、現代においては、自由という言葉は、多義であります。いろんな意味につかわれていると申し上げてもいいでありましよう。タバコをのむのが自由なのか、のまないのが自由なのか、と正反対の場合もある。極端に申し上げますと、みなさん方のおつかいになつている自由という言葉は、一人一人ちがつていると申し上げられると思うのであります。しかしそれでは、自由という言葉の意味はあいまいになるのであつて、そこで交通整理の必要が出て来るのであります。で、頭のわるい私は、自由というものを簡単に定義づけているのであります。つまり一つの自由は、何から何を救つてくれる自由なのか、ということによつて、その自由の性質がきめられると思つているのであります。私自身に関していえば、その人のつかつている自由なるものは、何から自分を救つてくれる自由なのかということによつて、その人の自由の性質がはつきりして来る。その人の自由は、一体、奴隷を鎖から救うところの自由であるのか、あるいはこの世の心配や不安や恐怖などから救つてくれるところの自由であるのか、それともこの社会や世界の不合理や矛盾から救つてくれるところの自由であるのか、というように何から救い何から救われるのかということによつて自由の性質がきまつ来る。したがつて、その自由を根拠におく、人生観や世界観もきまつて来る。どんな人生観や世界観も、何等かの自由を根拠にしないかぎりは成立しないからであります。だから簡単に申し上げますと、自由という言葉は、本来的な意味において、救いという言葉と同じ意味なのであります。だからほんとうの自由を求めていた私は、ほんとうの救いを求めていたといつていいのであります。だが、ほんとうの自由、ほんとうの救いの性格は何であるか。

ここでみなさん方と一緒に、簡単な筋の小説を例にとつて、一緒に考えてみたいとそう思うのであります。ある日、男と女が出会つて、おたがいに愛し合うようになつた。

○自由の多義性―

○一つの小説の例―決心して諦めなさい。男らしくそんな女のことを忘れて新しい出発を決断

○二つの自由の話―　女つて、女ひとりではない。たくさんいる。

要約しますと、それを救いとする人間の自由は、客観的な全体的な自由と主観的な個人的な自由とに、大きく二つに区別できると申し上げることができるのであります。しかしここで困つたことには、この二つの自由は矛盾し合うということならであります。といつてどちらをすてて、どちらをとるということはできない。どちらかの自由をすてたときには、人間として片輪の生き方しかできないということが、戦争やレジスタンスの体験から痛切なものとなつたのであります。先程申し上げました戦争中の「滅私奉公」についても同じことがいえましよう。私をほろぼして公に奉ずるという生き方が、戦後、個人の自由を殺してしまう非人間的な生き方、つまり人間として片輪の生き方だと批判されました。だが、ひるがつて、逆に公の方を滅して私の個人的な自由に生きるというのも片輪の生き方なのであります。戦争という体験を通じて世界の人々の得たものは、この二つの自由は共存させなければ、片輪でない真の人間となることはできないという人間の事実なのであります。共存という考え

方は、この二つの自由は、質のちがつた自由なので、そこに統一なんかあり得ないからであります。その共存を可能にするためには土台がいるわけで、その土台になるものこそ、「ほんとうの自由である」ということがわかつているのであります。いいかえるならば、この二つの自由の共存こそ、現代の人間的な要求として、その共存を可能にするほんとうの自由が、哲学者や文学者に追求されてきたと申し上げてもいいのであります。

フルシチヨフさんの二つの自由の平和共存も、このほんとうの自由、ほんとうの救いということを度外視しては成立しないと申し上げられるでしよう。[削除　今度のキューバ問題で、世界の私たちは、その事実を痛いほど知つたわけであります。この二つのアメリカとソビエトの質のちがつた自由の平和共存に、世界全体の破滅がゆだねられているということであります。いいかえれば、この世界全体を破滅から救うためには、二つの自由は平和共存してもらわなければならないということであります。しかしその二つの自由の平和共存を可能にするのは、世界の破滅という恐怖でなく、世界の破滅から救つてくれているほんとうの自由というもの、ほんとうの救いというものを土台としなければ、いつも私たちは、キューバ問題のような危機に見舞われるだろうということは、見易い道理であります。個人においても同様であつて、私たちの内と外の分裂を救うものは、私たちの決定的な破滅である死から救つてくれるほんとうの自由でなければならないということも、見易い道理でありましよう。]

。公に生きる自分、私に生きる自分、そのどちらを失つても、自分全体が失われているつまり死んでいるのも同然だという気がするのであります。しかしそのような、ほんとうの自由、ほんとうの救いというものがあるのでしようか。「ない」として小説を書きはじめた私に忽ち困つたことが起りました。「この世のなか[以下裁断]

「自由」としてが、ほんとうの自由であるという答えを出しました。また、先程名前をあげましたサルトルは、実存主義的な自由こそほんとうの自由であると考えています。またイギリスのグレアム・グリーンは、逆説的な自由を共存の根拠として提出しました。いずれにしましても理論的な欠陥をもつていると私には考えられるのであります。何故なら、私もほんとうの自由を求めて来た人間であるからであります。だからその論理的な欠陥に対する嗅覚(きゅうかく)だけは発達しているようなのであります。

それでは、ほんとうの自由、ほんとうの救いというものは、人間にはないのでありましようか。「ない」として小説を書きはじめた私に忽ち困つたことが起りました。「この世のなかには、ほんとうの自由もほんとうの救いもない」ということを書いているわけなのですから、自分の書いた作品から自分へ問いがはねかえつて来るのであります。ほんとうの自由、ほんとうの救いがないのなら、生きて行くほんとうの意味なんかあり得ない。

[以下ページ欠落]

## 椎名麟三講演メモ9（124161）

1962年10月9日、ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

神奈川労働大学での講演「私は何故小説を書くか」

神奈川労働学校

私の今日のお話のテーマは、「私は何故小説を書くか」でありますが、労働運動に必要な専門知識をさずけるというこの大学の目的からは、いささか外れているのではないかとお思いになつていらつしやる方が多いだろうと思います。しかも残念ながら、私自身も当惑しているのであります。実は文学案内のリーフレツトを見るまではこのことを知らなかつたのでありますが、この大学の事務局の方が、私に文学の話を何故依頼されたかを考えると、その理由に思いあたらないわけではありません。というのは、私が現在も背負いつづけている文学の課題は、実は労働者であつたときに背負わされたものであるからであります。その課題は何であつたかを、自分のくだらない身の上話を申し上げながら、何故書くかという文学の本質的な問題にふれてみたいと思うのであります。だから課外講座の意味で、楽な気持でおきき願いたいと思います。

私は、関西の姫路郊外の農村に育つた男でありますが、大阪にいる父と別居していた母とその農村に暮していたのであります。しかし父からの送金が絶えて生活に窮迫しましたので、母のかわりに父のもとへ経済交渉に行き、一喝のもとに追い出されて、母のもとへ帰るに帰れずにそのまま家出という形になつてしまつたのであります。そのとき中学三年の一学期のときでしたから、学歴は、みなさん方の方がずつと上だろうと思うのであります。

[以下ページ欠落]

いいかえますと、私たちの意識は、つねに何物からの自由としてしか意識できないということなのであります。

[削除　ここで、一昨年、お話ししました「表現について」の問題を思い起してもらいたいと思うのであります。この会へはじめて参加なさつた方もおられると思いますから、]簡単に申し上げますと、人間の自由が、たとえ孤独としての自由であれ、あるいは、さらに絶対的な世界全体からの自由であれ、また歴史的なあるいは日常的な相対的な自由であれ、その自由において、はじめて自己自身や世界とその事物が見えるのであります。いいかえれば、人間の自由というものは、光源—光の源なのであつて、自由のない人には、真暗な部屋に坐つているように何も見えない。私は、「赤い孤独者」を書いて以後、何も書けずにのんだくれていたのでありますが、そのとき、いつも文字通り眼の前が真暗な思いがしていました。自分の生き得る自由を見失つてしまつたからであります。しかし自由がやつて来て、つまり光がやつて来て、はじめてものが見える。私の場合は、イエス・キリストの恵みとして与えられた自由であつたわけでありますが、それはとにかく、何らかの自由という電灯をつけなければ、部屋のなかを見ることができないし、さらにそれを意識することはできない。だからまた、そこで生きて行くことはむろん、その部屋の何かについて考えたら、書いたりすることもできないわけなのであります。だが、ここで困つたことが起るわけで、人々のもつていらつしやる自由の性質がちがうということなのであります。

。赤い色、青い色。—その矛盾

。読者の立場—純粋な自由—[削除　全体からの]無条件な自由。

ひねくれた批評家の場合。

。高利貸の因業なおばあさんと映画。

○私と文学の関係

ここで、私自身と文学の関係について話したいと思います。[削除　私は、十四のとき、家庭の事情で家出したのでありますが、現在にいたるまで家出のしつ放しであります。家出少年時代は、自然科学の本が好きでしたが、十七のとき読んだドイツの社会主義者であるベーベルの「婦人論」を契機に左翼的な本を読みはじめたようであります。その翌年、母が、須磨の海で入水自殺をはかつて助けられたのを契機に、関西の私鉄の]

[以下ページ欠落]

# 椎名麟三講演メモ10（1241162）

年月日不明、ノート紙7枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書

## 1．日本文学の現状

［削除　私は一去年は「表現について」というテーマで、去年は「小説の技術」についてお話しいたしました。今年は、「小説の創作」というテーマでありますが、『何故一人の人間が小説を書くに至つたか』またその人間は後にキリスト教の洗礼を受けているのでありますが、『いわゆるキリスト者となつてから、プロテスタントの文学集団である「たねの会」*へ参加し、その後の文学活動の根拠をそこに置くようになつたか』という二点に焦点をしぼつて、自分自身のことを語りたいと考えているのであります。］

現代の文学は、戦前のそれとくらべて、たしかに多様であり多彩であります。フオークナーに似た小説があると思えば、カフカ風な小説もあります。一方にまた、社会主義的なリアリズムにつらぬかれた小説があるかと思えば、自然主義リアリズムの美しい作品もある。だが、ひとりの作家に、カフカ風な作品が書かれていたと思うと、次の作品は、それと相容れないアンチ・ロマン風な作品だとなると、私は、その作家の多才さに驚嘆を感じ得ないのであります。みなさんは、誰のことをいつているか、すでにお察しであるだろうと思います。ピュトール（ママ）の「心変り」の方法を模倣したことで、江藤淳という批評家と論戦を交わした—私は、論戦になつていないと思いますが—倉橋由美子*であります。むろん方法を真似るいうこと（ママ）自体は、問題ではない。しかし一昨年と去年との話のなかで、話しましたように、一つの方法というものは、その作家の内的な必然性として生れて来たのであるということ、いいかえれば、作者の生きている自由によつて裏打ちされているものであることを考えれば、レデイ・メードの服を買うように、右から左への直輸入は、情ない出来事だと思うのであります。月評家も、たくさんの作品に追われて、その作品の成功不成功という観点からしかとりあげない。いいかえれば、批評家の側も、作者の主体の内部へ入つて行くひまなんかなく、一つの文芸時評で、カフカ風の作品を賞めた後でアンチ・ロマン派の小説を賞めたりしている。［削除　佐古さんから著作権侵害を］訴えられるかも知れませんが、一体「文学はこれでいいのか」といいたくもなつて来ます。そこに欠如しているものは、何か。それは作者の自己であります。デンマーク　キルケゴールの定義によれば、自己とは精神であり、自分自身との関係だということになりますが、文学的にいいかえますと、自己自身からの自由だということになります。しかし直接に自己自身から自由になることができない。それは神様だけに可能な領域であります。と申しますのは、人間は何かについてしか、自分自身から自由にはなれないのであります。［削除　ここにキルケゴールの第三者が登場して来て、むつかしいことになつてしまうのであります。］

たしかに現代の作家は、忙しすぎる。しかしこの忙しいということは、佐古さんは、忙しいという字を分析して、リツシンベンに亡ぶ、うしなうであります（ママ）から、自己喪失の状態だといわれて以来、私は、忙しいといえなくなつてしまつて、仕方なくだまつていると、ますます忙しくなる。何しろ私は、心臓に欠陥をもつていて、半人前の人間でしかありません。それだのに、本業の小説はむろん、ラジオのドラマをやるやら、テレビ・ドラマをやるやら、芝居を書くやら、欲のふかい人間でありまして、全く忙しすぎる。しかしもしどんな忙しくても、作家には失えないものがあるはずであります。それなくしては、この世界が意味を失うところのもの、それが自己であるはずであります。もしこんな言葉を許されるとすれば、純文学とは、作者の自己を通して、人間が問題となる領域であるといえましよう。

だから一番はつきりわかるのは、盗作—他人の作品をぬすむ—盗作問題が起つたときでありましよう。純文学では、一挙に作家としての生命が、社会的に断たれてしまう。ところで大衆文学においては、いくら盗作しても、営業には差支えないわけであります。あの大藪春彦なんかは全くひどいものだと思いますが、しかしそれで平気なわけであります。むしろマス・コミの方で、それを奨励して書かせている嫌いがある。もうそうなれば、嘘にも、その作品を文学だといえなくなるでしよう。そしてまた読者の方も、面白ければいいわけで、しかしその面白さは、二度繰り返しては読めない面白さだと申し上げることができるでしよう。—もし時間がありますれば、一つの小説を読んで何故面白いと感じることができるか、ということにもふれてみたいと思つています。それでなくても、一夜にして有名になることもでき、年収も何百万という私なんかから考えられない収入も得られるという小説家々業は、小説志願の人々にある影響をあたえているということは事実です。私なんかのところへ無断で作品を送りつけて来られる人は、大抵、どこかの雑誌社に紹介してくれ、金に困つているからという手紙がその小包みのなかに入つています。—それでは、一体、小説を何故書くのか？

ある日本の有名な作家は、何故小説を書くかと問われて、金と虚栄のために書いているんだと答えていました。しかしむろんそれは、その作家のアイロニイであつて、何故小説を書くかという理由を拒絶するためのものであります。私に文学の眼をひらいてくれたドストエーフスキイも、金のために書いた作品が多い。しかし彼の作品に向つているところの自己は、金のための自己ではないということだけは確言できるのであります。いいかえれば、彼は彼自身の自由のために書いているからであり、また、小説ほどそれを書いている人間の人格、いいかえればその人が↗

人が、どんな自由を求め、どんな自由に生きているかを端的に示すものはないからであります。だから文学というものを一口に定義づけて、フランスのサルトルは、「文学というものは、人間が自由を求める一つの方法」だといつていますが、正にその通りなのであります。［削除　だからある場合には、ペンをすてて、デモに参加したら、ストライキもしなければならないということも起るのであります。］

いいかえますと、文学と人間の自由を切りはなしては考えられないのであります。それは、文学をつくるという創造の場で起るだけではなく、読むという行為のなかでも起るのであります。このことをわかりやすい例で申し上げたいと思います。

## 2　自己の自由についての［削除　意識の］めざめ

最初まず、自己についての［削除　意識］自由についてのめざめから考えてみたいと思います。天才の人は、も（ママ）三才ぐらいで自己についての自由の意識をもつているそうでありますが、私の場合は、鈍才なので、七つぐらい（小学の二年生ごろ）のときしか覚えておりません。そのころ私は、兵庫県の姫路市から一里半—つまり六キロほどはなれた農村に住んでいました。その日、学校から帰つてから、母親のいいつけで、村は同じでありますが、隣りの部落にある親戚の家へ行つたのであります。だが、子供のことですから、遊び呆けて夜になつてしまつた。あわてて帰つて来たのでありますが、私の部落である東坂と、隣りの部落である西坂の間に、用水池があるのであります。その土堤をつたつて帰るのが、早道なので、そこをつたつて帰つて来ました。その用水池のあたりは、私た

ちの遊び場所であり、夏は水泳ぎや、菱の実をとつたり、そのあたりには、ぐみの木も多く、またぬすむに恰好な柿の木にも恵れているという、私たち子供にとつては恰好な場所であり、夜でも平気でいままで幾度も通つているわけです。だが、そのとき、ふと池の面を見ると、月もないのに、まるでかなだらいぐらいの大きさの金色の眼が一つ、光つていて、小牛の鳴くような声が池の底から聞えて来るのであります。

○妙なグロテスクな生物。

みなさんは、必ず、天才の方は、三つぐらいのとき、おそい人は十才ぐらいの間にこのような経験をもつていらつしやるわけなのであります。しかしこの孤独という形でやつて来る意識のめざめは、当人にとつて恐ろしいものであり、気味のわるいものでありますから、すぐ忘れようとし、だからまた忘れてしまつておられる方も多いと思うのであります。そして私たちの自己についての意識が、世界からの孤独として意識されるところに、いいかえれば、世界からの自由でありますが、私たちの根本的な意識の不幸があると申し上げられます。

［削除　○人々と共にある自由として　孤独からの自由］

「何から救い、何から救われるのか」ということによつて自由の性質がちがつて来る。したがつて、その自由に根拠をおく人生観や世界観などもわかるのであります。

ここでわかりやさい例をとつて、みなさん方と一緒に考えてみたいと思います。

ここに一つの小説があります。筋はありふれたもので、ある日、男と女が出会つて愛し合うようになる。むろん出会わなければ話になりませんが。しかし女の方は次第にその男に不満を感じて来る。何故なら男の方は、家庭的な事情や経済的な問題もあつて、［削除　なかなか結婚しようとはしない］結婚できる状態ではなかつたからです。そのうちに、女は、その男に全くつめたくなつてしまつて、ふいに他の男と結婚してしまう。そして今晩が、その女の結婚式のある晩でなのです。男は、自分はどんなにその女を愛していたかを思い、その女を失つては、もう生きていけない気がしている。そして彼は、自分に絶望し、この世に絶望しながら、縁側に腰を下している。といつた小説があります。また、これに似た小説は、ことに週刊誌や中間小説といわれている作品に多く、みなさん方もしばしば出会つて来ておられると思います。

さて、この男の人の絶望について考えて見ましよう。女の人が、彼のところへ戻つて来さえすれば、できるなら結婚式をあげないで、式場から逃げ出して自分のところへ戻つて来さえすれば、彼の絶望は救われるでありましよう。だがこの場合、そんなことが望めないから彼は絶望していらつしやるわけなのであります。この場合、みなさん方は、どういうふうに、この彼の絶望をお救いになるか。［削除　その救い方によつて、みなさんの持つていらつしやる自由の性質が、したがつて、その自由を根拠とするところの人生観や世界観がわかるわけなのであります。］

この小説の場合、たしかに彼の絶望は、死ぬよりほかに解決はないように見える。しかし死ぬということは、ほんとは問題を解決するのではなく、問題を消し去るだけである。一タス一はいくらだと黒板に書いた問題を、黒板拭きで、消し去ることはできますが、一タス一は、いくらだという問題の解決にならないのと同じであります。つまりその男にとつて、生きていても、何の解決もないし、といつても死んでも解決にならないという事実のなかにおかれているというわけなのであります。全く新聞などの「人生案内」や「身の上相談」などの諸先生などでしたら、その救い方は、大体二つに大別できるようであります。個人的な主観的な救い方と、全体的な客観的な救い方の二つに大別できるようであります。つまり、「あきらめて、新しく出発しなさい」というように、個人の主観にその救いをもつて来るやり方と、また、「女つて、あの女ひとりだけじやない。あなたの好きになる女の方がまた必ずあらわれるでしよう」という救い方。私も十八才ごろ最初の失恋をしました。あの神戸と姫路との間を走つている電車の車掌をしているときであります。相手の女の人が、結婚してしまつたのです。といつても、相手の女の人には何の責任もなかつたので、つまり私が彼女が好きなのだということを知らなかつたのでありますが、それにもかかわらず彼女をうらみ、世のなかをうらんで、会社へ行く気がせず、下宿の二階で蒲団をかぶつて寝ていました。そのころ私と非常に親しくしていた仲間の架線屋が、その私の事情を知つていて見舞いに来たのでありますが、その男は、現在の「人生案内」の諸先生より決定的な救い方をした。つまり彼は、こういつたのであります。

「あの女ひとりに振られたといつたつて、地球上の女全部にふられたわけじやないんだ。人類二十三億のうち、少なくとも十一億五千万は女なんだ。三人や五人じやない、十一億五千万なんだぞ。一体どうするんだい、十一億五千万も、お前は」

というのであります。当時は、人類は二十三億だといわれていたのでありますが、しかし私の方は、十一億五千万、十一億五千万と聞いているうちに、だんだん妙な気持になつて来て、自分の失恋などひどくつまらなくなつて来て、一緒に酒を飲みに行つた、という経験をもつています。こういうふうな、全体的なもの、客観的な面をもつて来ての救い方が、「あきらめや決断」というような主観的な救い方に対してあるようであります。前の「あきらめや決断」の場合は、個人というものを重く見、個人［削除　の心に］を絶対［削除　性をあたえるやり］と考える考え方であります。個人の心が、いわば自由なのであり、だからまた、神なのであつて、だから最後に救うのは、個人の心なのだという個人主義的な世界観につながつて行きます。後の、女全体、あるいは地球全体というような場合は、申すまでもなく、この世における全体的なものを絶対［削除　性をあたえる生き］と考える考え方であり、そのかぎりでは、個人が消え去つて、全体がいつも神であり、だから全体が救いであるという全体主義的な、あるいは客観主義的な傾向をもつところの世界観につながつてまいります。戦争中滅私奉公という言葉がありましたが、私をほろぼして公に奉ずるということが、ほんとうの日本人の生き方だといわれていましたが、このような考え方も、全体主義的であつたということはいうまでもありません。しかしよく考えて見ますと、人間の自由や、だからその自由を救いとするところのものは、個人的なものと全体的なもののほかにはないように思われるのであります。

それでは、女に裏切られた男の小説に戻りましよう。その小説では、その男の絶望を、どんなふうに救つているのでありましようか。一見その小説は、その男を救つていないように見える。文学用語をつかいますと、その男の絶望を突放しているように見える。つまりその男は、「死のうと思つて縁側に腰を下していた」で終つているからであります。だが、それだけで終るということに、作者自身が不安を感じる。このへんが、小説をつくる側の精神というものについての面白さがあるのでありますが、それはとにかく、その作者は、どうしても、「死のうと思つて縁側に腰を下していた」の次に、次の一行を加えているのであります。「そのときふと庭の隅へ眼をやると、ゆたかな房のアジサイの花が、大きく咲いていた」と書いているのであります。そしてたしかに、このアジサ

イの花が、あたかも彼の絶望をすくつたように感じられて、読者の私たちも美的な感動を感ずる、というような仕掛になつているのであります。（しかしこのアジサイそのものには特別な意味はない。汽車の汽笛の音でも雨が降つて来たでもいい）

さて、このような救い方は、何を意味するかは、申し上げるまでもないと思います。この場合も明らかに、全体的なものを絶対とするところの救い方であり、この小説の場合は、その全体的なものとは、アジサイによつて象徴されるところの自然なのだというだけであります。つまり自然が自由であり、自然が神であり、だから自然が救いとなるところのものとして、作者は、それに生きているということがいえるでありましよう。文学に、自然主義的文学という名で論ぜられているものは、多かれ少かれ、このような自然というものを絶対と考えるところの、人生観や世界観に関係をもつているといつていいでありましよう。［削除（したがって、自然を絶対と考えるかぎりにおいて、その人生観や世界観は、運命論的であり決定論的であると申し上げられましよう。日本人の場合には、この自然主義的な傾向がつよいといつていいと思います。ここで、先ずいままで申し上げたことを要約しますと、まず第一に、ほんとうの救いを求める声が、イギリスやフランスからも聞えて来るということ、第二は、私たちが日常口にしている自由というものは、救いの意味をもつているということ、第三は、その自由は大別すると個人的な主観的なものと全体的な客観的なものに別けられるということであります。］

○この分裂しているというところに明日お話ししようと思つている現代の［削除　ニヒリズム］困難があるのであります。

＊たねの会　椎名麟三主宰のプロテスタント文芸集団。佐治純一郎、高堂要らが参加

＊ピュトールの「心変り」～倉橋由美子　倉橋由美子の「暗い旅」（1961年）に対し、江藤淳がミシェル・ビュトールの「心変わり」の模倣であると主張したことから模造品論争へと発展した



# 石川淳／椎名麟三 主な収蔵資料一覧

# 主な石川淳・自筆資料一覧

太字は本誌掲載資料

| 資料番号 | 資料名 | 備考・書き出し等 | 素材 | 所蔵者（☆はすべて石川眞樹氏） |
|---|---|---|---|---|
| 【原稿・草稿】 | | | | |
| 1229056 2 | 石川淳原稿『語国智人伝』 | | 400字詰原稿用紙32枚　ペン、鉛筆書 | 石井耕氏、石井牧氏、平賀素穂氏 |
| 1229051 | 石川淳原稿『素質清言』 | | 400字詰原稿用紙307枚　ペン書 | ☆ |
| 1229052 | 石川淳原稿『華厳』 | 連載6回分及び未掲載1回分他 | 400字詰原稿用紙202枚　ペン書 | ☆ |
| 1229053 | 石川淳原稿『素質理言』 | | 400字詰原稿用紙438枚　ペン書　刊行物への手入れ5枚 | ☆ |
| 1229054 | 石川淳原稿「占しべれ」 | | 400字詰原稿用紙46枚　ペン書 | ☆ |
| 1229055 | 石川淳原稿「鳳凰」 | 『事現』　収録 | 400字詰原稿用紙26枚　ペン書 | ☆ |
| 1229056 | 石川淳原稿「野干魂」 | | 400字詰原稿用紙94枚　ペン書 | ☆ |
| 1229057 | 石川淳原稿「影ふたつ」 | | 400字詰原稿用紙38枚　ペン書 | ☆ |
| 1229058 | 石川淳原稿「夜は夜もすがら」 | | 400字詰原稿用紙36枚　ペン書 | ☆ |
| 1229059 | 石川淳原稿「南枝向日」 | 『事現』　収録 | 400字詰原稿用紙50枚　ペン書 | ☆ |
| 1229060 | 石川淳原稿「滝のうへいす」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙20枚　ペン書 | ☆ |
| 1229061 | 石川淳原稿「おとしばなし和唐内」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙23枚　ペン書 | ☆ |
| 1229062 | 石川淳原稿「篠弘」 | 『事現』　収録 | 400字詰原稿用紙44枚　ペン書 | ☆ |
| 1229063 | 石川淳原稿「妖女」 | | 400字詰原稿用紙52枚　ペン書 | ☆ |
| 1229064 | 石川淳原稿「桑」 | 『事現』　収録 | 400字詰原稿用紙28枚　ペン書 | ☆ |
| 1229065 | 石川淳原稿「霊樂」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙20枚　ペン書 | ☆ |
| 1229067 | 石川淳原稿「須枝」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙22枚　ペン書 | ☆ |
| 1229068 | 石川淳原稿「さらは垣」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙21枚　ペン書 | ☆ |
| 1229069 | 石川淳原稿「帝屋帝」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙25枚　ペン書 | ☆ |
| 1229070 | 石川淳原稿「末の松山」（部分） | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙29枚　ペン書 | ☆ |
| 1229071 | 石川淳原稿「ファルス」（部分） | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙19枚　ペン書 | ☆ |
| 1229072 | 石川淳原稿「白鬚奇鬚」 | 『事現』　収録 | 400字詰原稿用紙85枚　ペン書 | ☆ |
| 1229073 | 石川淳原稿「番の葬式」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙30枚　ペン書 | ☆ |
| 1229074 | 石川淳原稿「他人の自由」 | 『事現』　収録 | 400字詰原稿用紙57枚　ペン書 | ☆ |
| 1229075 | 石川淳原稿「蝸蝸」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙30枚　ペン書 | ☆ |
| 1229076 | 石川淳原稿「鷹」 | | 400字詰原稿用紙104枚　ペン書 | ☆ |
| 1229077 | 石川淳原稿「鳴神」 | 『鳴神』　収録 | 400字詰原稿用紙100枚　ペン書 | ☆ |
| 1229078 | 石川淳原稿「前身」 | | 400字詰原稿用紙29枚　ペン書 | ☆ |
| 1229079 | 石川淳原稿「大蔵の御」 | | 400字詰原稿用紙15枚　ペン書 | ☆ |
| 1229080 | 石川淳原稿「猿」 | | 400字詰原稿用紙32枚　ペン書 | ☆ |
| 1229081 | 石川淳原稿「犯人」 | | 400字詰原稿用紙21枚　ペン書 | ☆ |
| 1229082 | 石川淳原稿「浅花」 | | 400字詰原稿用紙16枚　ペン書 | ☆ |
| 1229083 | 石川淳原稿「しべれ歌仙（第1回）」 | | 400字詰原稿用紙21枚　ペン書 | ☆ |
| 1229084 | 石川淳原稿「しべれ歌仙（第2回）」（未発表） | | 400字詰原稿用紙17枚　ペン書 | ☆ |
| 1229085 | 石川淳脚本原稿「おまくの蔵はおまくだ」（截田） | | 400字詰原稿用紙178枚　ペン書 | ☆ |
| 1229086 | 石川淳原稿「森鷗外集解説」 | | 400字詰原稿用紙15枚　ペン書 | ☆ |
| 1229087 | 石川淳原稿「ゆう玄始末」 | | 400字詰原稿用紙47枚　ペン書 | ☆ |
| 1229088 | 石川淳原稿「世界は金色」 | | 400字詰原稿用紙4枚　ペン書 | ☆ |
| 1229089 | 石川淳原稿「双璧」 | | 400字詰原稿用紙4枚　ペン書 | ☆ |
| 1229090 | 石川淳原稿「この顔を見よ」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229091 | 石川淳原稿「詩的回想断片」 | | 400字詰原稿用紙6枚　ペン書 | ☆ |
| 1229092 | 石川淳原稿「安部君の事」 | | 400字詰原稿用紙4枚　ペン書 | ☆ |
| 1229093 | 石川淳原稿「飛花譜」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229094 | 石川淳原稿「作用して来るもの」 | 第62回芥川賞選評 | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229095 | 石川淳原稿「私見」 | 第63回芥川賞選評 | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229096 | 石川淳原稿「一本の杭」 | 第64回芥川賞選評 | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229097 | 石川淳原稿「一つえらぶとすれば……」 | 第65回芥川賞選評 | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229098 | 石川淳原稿「コスモスの夢」 | | 400字詰原稿用紙6枚　ペン書 | ☆ |
| 1229099 | 石川淳原稿「閑谷学校」 | | 400字詰原稿用紙6枚　ペン書 | ☆ |
| 1229100 | 石川淳原稿「回想断片」 | | 400字詰原稿用紙3枚　ペン書 | ☆ |
| 1229101 | 石川淳原稿「安東次男著作集に寄す」 | | 400字詰原稿用紙1枚　ペン書 | ☆ |
| 1229102 | 石川淳原稿「色道大鏡に寄す」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229103 | 石川淳原稿「恩人」 | | 400字詰原稿用紙4枚　ペン書 | ☆ |
| 1229104 | 石川淳原稿「選評寸言」 | 第1回大佛次郎賞選評 | 400字詰原稿用紙1枚　ペン書 | ☆ |
| 1229105 | 石川淳原稿「天谷すー著『食通知ったかぶり』序」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229106 | 石川淳原稿「三古會の書状に寄す」 | | 400字詰原稿用紙1枚　ペン書 | ☆ |
| 1229107 | 石川淳原稿「辻素一著『味覚三昧』序」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229108 | 石川淳原稿「椿」 | | 400字詰原稿用紙10枚　ペン書 | ☆ |
| 1229109 | 石川淳原稿「花たちばな」 | | 400字詰原稿用紙6枚　ペン書 | ☆ |
| 1229110 | 石川淳原稿「コント・クリュエルについて」 | | 400字詰原稿用紙5枚　ペン書 | ☆ |
| 1229111 | 石川淳原稿「茶郷仏」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229112 | 石川淳草稿「佐藤垂士版畫集『巴里』譜」 | | 400字詰原稿用紙10枚　ペン書 | ☆　☆ |
| 1229113 | 石川淳原稿「酒飲本大成に寄す」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229114 | 石川淳原稿「滝澤龍彦著作集に寄す」 | | 400字詰原稿用紙2枚　ペン書 | ☆ |
| 1229115 | 石川淳原稿「武濃徳断片」 | | 400字詰原稿用紙5枚　ペン書 | ☆ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1291116 | 石川淳原稿 | 「六道遊行（第15回）」 | 400字詰原稿用紙23枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291117 | 石川淳原稿 | 「六道遊行（第16回）」 | 400字詰原稿用紙23枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291118 | 石川淳原稿 | 「六道遊行（第17回）」 | 400字詰原稿用紙23枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291119 | 石川淳原稿 | 「六道遊行（第18回）」 | 400字詰原稿用紙23枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291120 | 石川淳原稿 | 「六道遊行（第19回）」 | 400字詰原稿用紙24枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291121 | 石川淳原稿 | 「六道遊行（第20回）」 | 400字詰原稿用紙19枚 | ペン書 | ☆ |

## 【日記・旅行記等】

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| **1291123** | **石川淳日記** | **昭和25年1月1日―昭和26年12月31日** | **ノート60枚綴り（自筆部分91面）** | **ペン書** | ☆ |
| 1291124 | 石川淳日記 | 昭和27年1月1日―12月31日 | ノート50枚綴り（自筆部分54面） | ペン書 | ☆ |
| 1291125 | 石川淳日記 | 昭和28年1月1日―12月31日 | ノート50枚綴り（自筆部分45面） | ペン書 | ☆ |
| 1291126 | 石川淳日記 | 昭和29年1月1日―8月25日 | ノート50枚綴り（自筆部分7面） | ペン書 | ☆ |
| 1291127 | 石川淳旅行メモ | 昭和53年5月15日―6月3日 | ノート40枚綴り（自筆部分23面） | ボールペン、ペン書 | ☆ |

## 【書簡】

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1215586 | 石川淳 | 筑摩書房あてはがき　昭和34年2月25日 | 官製はがき | ペン書 | 石井耕氏、石井牧氏、平賀美穂氏 |

## 【創作メモほか】

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1291128 | 石川淳創作メモ | 「南画大體」 | 400字詰原稿用紙4枚 | メモ用紙5枚　鉛筆書 | ☆ |
| 1291129 | 石川淳 | 荻生徂徠関連メモ | 学研美術出版部用箋3枚 | 鉛筆書 | ☆ |
| 1291130 | 石川淳 | 「白猿」　メモ | 用紙2枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291131 | 石川淳 | 抜き書き　1 | 文芸春秋特選便箋半切 | ペン書 | ☆ |
| 1291133 | 石川淳 | 近世絵画関連メモ　1 | 便箋10枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291134 | 石川淳 | 近世絵画関連メモ　2 | 便箋19枚 | ペン書　鉛筆書 | ☆ |
| 1291135 | 石川淳 | 近世絵画関連メモ　3・英文抜書メモ | 便箋46枚 | ボールペン、鉛筆、ペン書 | ☆ |
| 1291136 | 石川淳 | 「夷齋遊戯」寄贈先リスト | 400字原稿用紙1枚 | ペン書 | ☆ |
| 1291137 | 石川淳旧蔵 | 加藤周一住所メモ | 便箋1枚 | タイプ　ペン書 | ☆ |

七代目市川團十郎について
馬無夜草不肥　人無横財不富

※資料番号1291124・1291125・1291126については、本誌次号に翻刻を掲載予定。



# 主な椎名麟三・自筆資料一覧

「　」は作品名、［　］は推定される作品名。作品名のわからない草稿は無題とし、その後に書き出し部分を「　」で記載した。
用紙裏面が別作品の草稿の場合もあり。判読不明文字には「＊」を使用した。太字は本誌掲載資料

| 資料番号 | 資料名 | 備考・推定作品・書き出し等 | 素材 | 寄贈者（★はすべて大坪經子氏） |
|---|---|---|---|---|
| **【原稿・草稿】** | | | | |
| 239985 | 椎名麟三原稿 | 「戦争ノイローゼ」 | 200字詰原稿用紙4枚　鉛筆書 | |
| 514402 | 椎名麟三原稿 | 「美しい女」（冒頭部分） | 200字詰原稿用紙2枚　鉛筆書 | |
| 1239660 | 椎名麟三草稿 | 「境界線上の恋」 | ノート紙14枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239661 | 椎名麟三草稿 | 「みぞれ降る夜に」 | ノート紙12枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239662 | 椎名麟三草稿 | 「初期のこれの作品に一貫するものは」 | ノート紙3枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1239663 | 椎名麟三草稿 | 「塵灰の中に」第1話 | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239664 | 椎名麟三草稿 | 「＊＊の告白」 | ノート紙2枚　鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1239665 | 椎名麟三草稿 | 「解体する自己」 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239666 | 椎名麟三草稿 | 「平和について」 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239667 | 椎名麟三草稿 | 「黄昏の廃墟」 | ノート紙26枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239668 | 椎名麟三草稿 | 「虚無への」 | ノート紙6枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239669 | 椎名麟三草稿 | 「情熱」 | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239670 | 椎名麟三草稿 | 「季節外れの告白」 | ノート紙8枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239671 | 椎名麟三草稿 | 「世界へ」 | ノート紙1枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239672 | 椎名麟三草稿 | 「人間」 | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239673 | 椎名麟三草稿 | 「戦後文学の意味」 | レポート用紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239674 | 椎名麟三草稿 | 「墓地でなしたる演説」 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239675 | 椎名麟三草稿 | 「映画についての随想」 | レポート用紙2枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239676 | 椎名麟三草稿 | 「永遠なる序章」 | ノート紙10枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239677 | 椎名麟三草稿 | 「壁のなかの記録」 | ノート紙4枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239678 | 椎名麟三草稿 | 「密告狂の女」 | ノート紙2枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239679 | 椎名麟三草稿 | 「現代の絶望」 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239680 | 椎名麟三草稿 | 「夜の家」 | ノート紙4枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239681 | 椎名麟三草稿 | 「壁のなかの記録」 | ノート紙4枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239682 | 椎名麟三草稿 | 「猫の生活力」 | ノート紙1枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239683 | 椎名麟三草稿 | 「レッテルについて」 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239684 | 椎名麟三草稿 | 「死と愛」 | ノート紙2枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239685 | 椎名麟三草稿 | 「死と愛について」 | ノート紙1枚　赤サインペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239686 | 椎名麟三草稿 | 「地にてつなぐもの」 | ノート紙3枚　サインペン・鉛筆書 | ★ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1239887 | 椎名麟三草稿　［人間の条件について］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239888 | 椎名麟三草稿　［私の言い分］ | | ノート紙4枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239889 | 椎名麟三草稿　［その日まで］ | | ノート紙8枚　サインペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239990 | 椎名麟三草稿　［雨の上高地］ | | ノート紙3枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239991 | 椎名麟三草稿　［希望］　1 | | ノート紙16枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239992 | 椎名麟三草稿　［希望］　2 | | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239994 | 椎名麟三草稿　［深空会見記　汽車に乗っていたドンファン］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239995 | 椎名麟三草稿　「文学に於ける客観性について」 | 「適切にて」 | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239996 | 椎名麟三草稿　［自由］ | | ノート紙7枚　赤サインペン・鉛筆書 | ★ |
| 1239997 | 椎名麟三草稿　「好子は十六」 | 「骸骨」 | ノート紙4枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1239998 | 椎名麟三草稿　［未来］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1239999 | 椎名麟三草稿　「狂人」 | 「三人」 | ノート紙7枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240000 | 椎名麟三草稿　［亭津の夜］ | | ノート紙8枚　赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240001 | 椎名麟三草稿　［便宜］ | | ノート紙2枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1240002 | 椎名麟三草稿　［慶天］ | | ノート14枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240003 | 椎名麟三草稿　［静かなる村］ | | ノート紙10枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240040 | 椎名麟三草稿　［信仰と文学］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240050 | 椎名麟三草稿　［漫遊］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240060 | 椎名麟三草稿　［無邪気な人々］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240070 | 椎名麟三草稿　［現代の魔術］ | | ノート紙4枚　ペン・赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240080 | 椎名麟三草稿　［南博「生きる不安の分析」］ | | ノート紙3枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240090 | 椎名麟三草稿　［現代青年論］ | | ノート紙14枚　青鉛筆・赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240100 | 椎名麟三草稿　［唱歌について］ | | ノート紙2枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1240110 | 椎名麟三草稿　［河出書房版「新文学全集　椎名麟三集」あとがき］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240112 | 椎名麟三草稿　［「漫遊」に寄せて　作者の言葉］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240113 | 椎名麟三草稿　［文学と自由の問題］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240114 | 椎名麟三草稿　［現代をどう生きるか　往復書簡］ | | ノート紙4枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240115 | 椎名麟三草稿　［弧蹴りの紐］ | | ノート紙1枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240116 | 椎名麟三草稿　［自由の彼方で］ | | 200字詰原稿用紙5枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240117 | 椎名麟三脚本草稿　［愛と死の谷間］ | | ノート紙16枚　赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240118 | 椎名麟三草稿　［古き神の再来拒否］ | | ノート紙1枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1240119 | 椎名麟三草稿　［蹉しき贈物］ | | ノート紙15枚　青鉛筆・赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240020 | 椎名麟三草稿　［愛と死の谷間］ | | ノート紙2枚　赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240021 | 椎名麟三草稿　［不幸な女］ | | ノート紙2枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240022 | 椎名麟三脚本草稿　「鶯はふたたび囀く（梗概）」 | | 200字詰原稿用紙1枚　鉛筆書 | ★ |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1240023 | 椎名麟三草稿　［片隅の人生］ | | 200字詰原稿用紙61枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240024 | 椎名麟三草稿　［愛の証言］ | | 200字詰原稿用紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240025 | 椎名麟三草稿　［恋愛論その2　愛の郷愁］ | 「愛について（鉛筆）」 | 200字詰原稿用紙3枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240026 | 椎名麟三原稿　［理河］ | | 200字詰原稿用紙3枚　赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240027 | 椎名麟三草稿　［理河］（連載第6回） | | 200字詰原稿用紙21枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240028 | 椎名麟三草稿　［弧砕きについて］ | | 200字詰原稿用紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240029 | 椎名麟三草稿　［現代の恋愛論］ | | 200字詰原稿用紙10枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240030 | 椎名麟三草稿　「日本映画に対する私の希望」 | 「日本映画への希望」 | 200字詰原稿用紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240031 | 椎名麟三草稿　「幸田文「流れる」」 | | 200字詰原稿用紙1枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240032 | 椎名麟三草稿　［まぼろしの門］ | | 200字詰原稿用紙12枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240033 | 椎名麟三草稿　［主人公の創造］ | | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240034 | 椎名麟三草稿　「私はどういう風にして小説家になったか」 | 「私が作家になったとき」 | 200字詰原稿用紙6枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240035 | 椎名麟三草稿　「私の聖者物語（5）」 | | 200字詰原稿用紙26枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240036 | 椎名麟三草稿　［思い出をたずねて］ | | 200字詰原稿用紙6枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240037 | 椎名麟三草稿　「狂信者」 | 「悪魔」 | 200字詰原稿用紙21枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240038 | 椎名麟三草稿　［狂った季節］ | | 200字詰原稿用紙2枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240039 | 椎名麟三脚本草稿　［生きた心を］ | | 200字詰原稿用紙1枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240040 | 椎名麟三草稿　［シナリオと映画精神］ | | 200字詰原稿用紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240041 | 椎名麟三草稿　［姫路城］ | | 200字詰原稿用紙1枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240042 | 椎名麟三草稿　［衆君思想くの逆転］ | | 200字詰原稿用紙1枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240043 | 椎名麟三草稿　「人間の矛盾について」 | | 200字詰原稿用紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240044 | 椎名麟三草稿　「毒薬」 | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240045 | 椎名麟三草稿　無題　「趣味とはそこに自分の…」 | | ノート紙2枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1240046 | 椎名麟三草稿　無題　「祈り」 | | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240047 | 椎名麟三草稿　無題　「僕は今日も近所の…」 | | ノート紙1枚　ペン・鉛筆書 | ★ |
| 1240048 | 椎名麟三草稿　無題　「人々は腹をくくらしながら…」 | | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240049 | 椎名麟三草稿　無題　「（アナーキスト遇間の会合…」 | | ノート紙1枚　赤サインペン・鉛筆書 | ★ |
| 1240050 | 椎名麟三草稿　無題　「この小説は目立った…」 | | ノート紙1枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240051 | 椎名麟三草稿　無題　「伊藤整「火の鳥」文芸春秋…」 | | ノート紙2枚　ペン・赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240052 | 椎名麟三草稿　無題　「大田洋子「山上」（弧像）…」 | | ノート紙2枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240053 | 椎名麟三草稿　無題　「一万円札が出るという…」 | | ノート紙3枚　赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1240054 | 椎名麟三草稿　無題　「深夜僕は仕事部屋を出た…」 | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240055 | 椎名麟三草稿　無題　「のである。三三年前、…」 | | 200字詰原稿用紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240056 | 椎名麟三草稿　無題　「眼の前が真暗になって…」 | | 200字詰原稿用紙9枚　鉛筆書 | ★ |
| 1240057 | 椎名麟三草稿　無題　「もちろん当然な話である…」 | | 200字詰原稿用紙1枚　鉛筆書 | ★ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1240158 | 椎名麟三草稿　無題　「どのやつに歓喜に…」 | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241199 | 椎名麟三草稿　「ある大学生の手記」 | | ノート紙4枚　鉛筆書 | ★ |
| 【創作メモ・講演メモほか】 | | | | |
| 1239993 | 椎名麟三創作メモ　［深尾正治の手記］ | | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241166 | 椎名麟三創作メモ　［帰郷］ | | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241167 | 椎名麟三創作メモ　「霧の憂愁」の語注意　表現の相違 | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241168 | 椎名麟三創作メモ　［季節外れの告白］ | | ノート紙4枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241220 | 椎名麟三創作メモ　［地にてつなぐもの］ | | ノート紙1枚　鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241221 | 椎名麟三創作メモ　「可愛い〻女」 | 「喜劇」 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241222 | 椎名麟三創作メモ　［自由］ | | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241223 | 椎名麟三創作メモ　［小市民］ | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241224 | 椎名麟三創作メモ　「覚書」 | | ノート紙2枚　鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241225 | 椎名麟三創作メモ　「繰り返し」 | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241226 | 椎名麟三創作メモ　「公訴権消滅」 | 「處女」 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241227 | 椎名麟三創作メモ　「現代文学の動向というより状況判断」 | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241228 | 椎名麟三創作メモ　脚本［愛と死の谷間］ | | ノート紙2枚　赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1241229 | 椎名麟三創作メモ　「銀座の真中へ行って助けてくれーといいたい」 | 「愛と死の谷間」 | ノート紙4枚　赤鉛筆・青鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1241230 | 椎名麟三創作メモ　脚本「愛の鉱煙」 | 「愛と死の谷間」 | ノート紙2枚　赤鉛筆・鉛筆書 | ★ |
| 1241310 | 椎名麟三創作メモ　「罪なき罪」 | | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241312 | 椎名麟三創作メモ　「神の道化師」 | | ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆書 | ★ |
| 1241313 | 椎名麟三創作メモ　「思い出をたずねて」 | | 200字詰原稿用紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241314 | 椎名麟三創作メモ　「人生案内や身の上相談」 | | ノート紙2枚　ペン書 | ★ |
| 1241315 | 椎名麟三創作メモ　1 | 戦争中一群の労働者が、土木工事のために… | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241316 | 椎名麟三創作メモ　2 | 憎悪を超へる契機となるものは… | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241317 | 椎名麟三創作メモ　3 | 世界が救はれないかぎり私は救はれない。 | ノート紙1枚　ペン書 | ★ |
| 1241318 | 椎名麟三創作メモ　4 | 文春予定　構想　下書　清書… | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241319 | 椎名麟三創作メモ　5 | 殺してはならない。　同時に殺されては… | 400字詰原稿用紙半分1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241409 | 椎名麟三創作メモ　6 | 現代プロテスタントにおける魔の遺産 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241410 | 椎名麟三創作メモ　7 | 事人所（ドアに鍵が差してある） | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241442 | 椎名麟三創作メモ　8 | ひとりの男がゐる。ニヒリスト。彼は… | ノート紙4枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241443 | 椎名麟三創作メモ　9 | 真の側からの非難　善の側からの非難 | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241444 | 椎名麟三創作メモ　10 | 私は自分の卑屈さによって自分の傲慢さを… | ノート紙1枚　鉛筆書 | ★ |
| **1241445** | **椎名麟三講演メモ　「戦後文学の意味」** | | **ノート紙1枚　鉛筆書** | ★ |
| **1241466** | **椎名麟三講演メモ　「文学する心」** | | **ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書** | ★ |
| **1241467** | **椎名麟三講演メモ　「自由と倫理（第一日）」** | | **ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆書** | ★ |
| **1241468** | **椎名麟三講演メモ　「人間の自由について」** | | **ノート紙6枚　鉛筆・赤鉛筆書** | ★★ |
| 1241469 | 椎名麟三講演メモ　「小説の技術について」 | | ノート紙10枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241550 | 椎名麟三講演メモ　「文学の視点」 | | ノート紙7枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| **1241551** | **椎名麟三講演メモ　「作家と生活」** | | **ノート紙6枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書** | ★ |
| 1241552 | 椎名麟三講演メモ　「自由と共存」 | | ノート紙9枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| **1241553** | **椎名麟三講演メモ　1** | 今日「人間について」といふテーマで… | **400字詰原稿用紙半分（裏面便箋）1枚　鉛筆書** | ★ |
| **1241554** | **椎名麟三講演メモ　2** | 今日お話しようとする命題は、一応… | **ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆書** | ★ |
| **1241555** | **椎名麟三講演メモ　3** | 宗教というものと、文学というものは、… | **岩波書店用箋5枚　鉛筆書** | ★ |
| **1241556** | **椎名麟三講演メモ　4** | 「生きるということ」は「愛するということだ」… | **ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆書** | ★ |
| **1241557** | **椎名麟三講演メモ　5** | ○これから考えて見ますと、人間の「ほんとうの… | **ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆書** | ★ |
| **1241558** | **椎名麟三講演メモ　6** | ○希望と自由の関係　私は、ドストエフスキイ… | **ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆書** | ★ |
| **1241559** | **椎名麟三講演メモ　7** | ○しかし私は、小さいときから自分を… | **ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書** | ★ |
| **1241560** | **椎名麟三講演メモ　8** | ドストエフスキイにならつていうならば… | **ノート紙2枚半　鉛筆・赤鉛筆・ペン書** | ★ |
| **1241661** | **椎名麟三講演メモ　9** | 神奈川労働学校　私の今日のお話の… | **ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書** | ★ |
| **1241662** | **椎名麟三講演メモ　10** | **1．日本文学の現状　私は一五年は…** | **ノート紙7枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書** | ★ |
| 1241663 | 椎名麟三講演メモ　11 | そして小説入門書などを読みあさつて… | ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241664 | 椎名麟三講演メモ　12 | 1．孤独について　私は医学的方面から… | ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆書 | ★ |
| 1241665 | 椎名麟三講演メモ　13 | それらの孤独には、理由というものが… | ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆書 | ★ |
| 1241666 | 椎名麟三講演メモ　14 | 遠藤周作さんは、「宗教と文学」という… | ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆書 | ★ |
| 1241667 | 椎名麟三講演メモ　15 | ところが、その自殺は、滑稽なこととなり… | ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241668 | 椎名麟三講演メモ　16 | 要約しますと、人間の自由は、客観的な… | ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆書 | ★ |
| 1241669 | 椎名麟三講演メモ　17 | 刑務所の裏門から放り出されてからは… | ノート紙2枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241670 | 椎名麟三講演メモ　18 | 1．信仰と文学　私は、この前に一度… | ノート紙5枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241671 | 椎名麟三講演メモ　19 | 女子学院、私は、たださえ、話が下手ですか… | ノート紙1枚　鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241672 | 椎名麟三講演メモ　20 | それでは、ジミイという男は、どんな男が… | ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241673 | 椎名麟三講演メモ　21 | さて、戦後「深夜の酒宴」を発表したのを… | ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆書 | ★ |
| 1241674 | 椎名麟三講演メモ　22 | 私は、あのイギリスのオズボーンの訴えを… | ノート紙4枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241675 | 椎名麟三講演メモ　23 | の復活の箇所を読んでいたときに… | ノート紙2枚　鉛筆書 | ★ |
| 1241676 | 椎名麟三講演メモ　24 | ＮＨＫ高知放送局　私は、今日、坂本竜馬の… | ノート紙3枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241677 | 椎名麟三講演メモ　25 | サマセットモーム　文学の方法に大別して… | ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★ |
| 1241678 | 椎名麟三講演メモ　26 | たないのだ」と結論が形づくられて… | ノート紙1枚　鉛筆・赤鉛筆・ペン書 | ★★ |
| 1253600 | 椎名麟三　署名入りノート表紙一式 | | 紙（ノート表紙）6枚 | ★ |

※資料番号1241663～1241665、1241667～1241678については、本誌次号に翻刻を掲載予定。資料番号1241666は、「信仰と実作」（『椎名麟三全集　20　評論7』冬樹社、1977年）と同内容

謝辞
本誌刊行にあたり、格別のご協力を賜りました関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

協力（敬称略・50音順）
安部賢治
池澤一郎
石川眞樹
大坪真美子

**世田谷文学館　収蔵資料〈調査と探究〉01**
**石川淳／椎名麟三［上巻］**

監修　紅野謙介
翻刻・編集　小池智子　瀬川ゆき　竹田由美　中垣理子　原辰吉
資料撮影　須藤正男
デザイン　溝端貢（ikaruga.）
印刷　共同製本株式会社

発行日　2024年2月27日
編集・発行　公益財団法人せたがや文化財団　世田谷文学館
〒157-0062　東京都世田谷区南烏山1-10-10
Tel.03-5374-9111
https://www.setbun.or.jp

＊著作権等については極力調査いたしましたが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。
©2024 Setagaya Literary Museum